

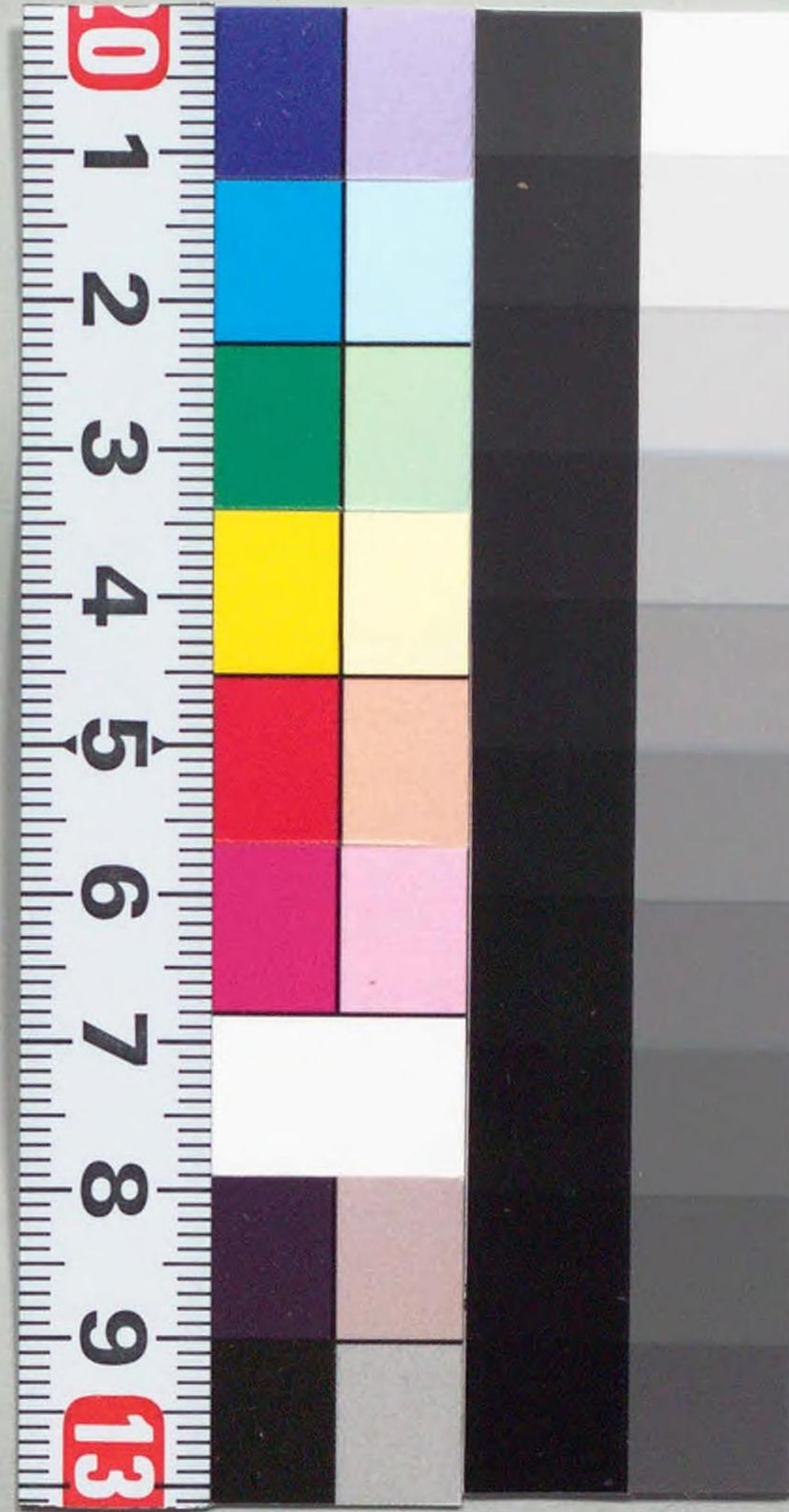
西行論

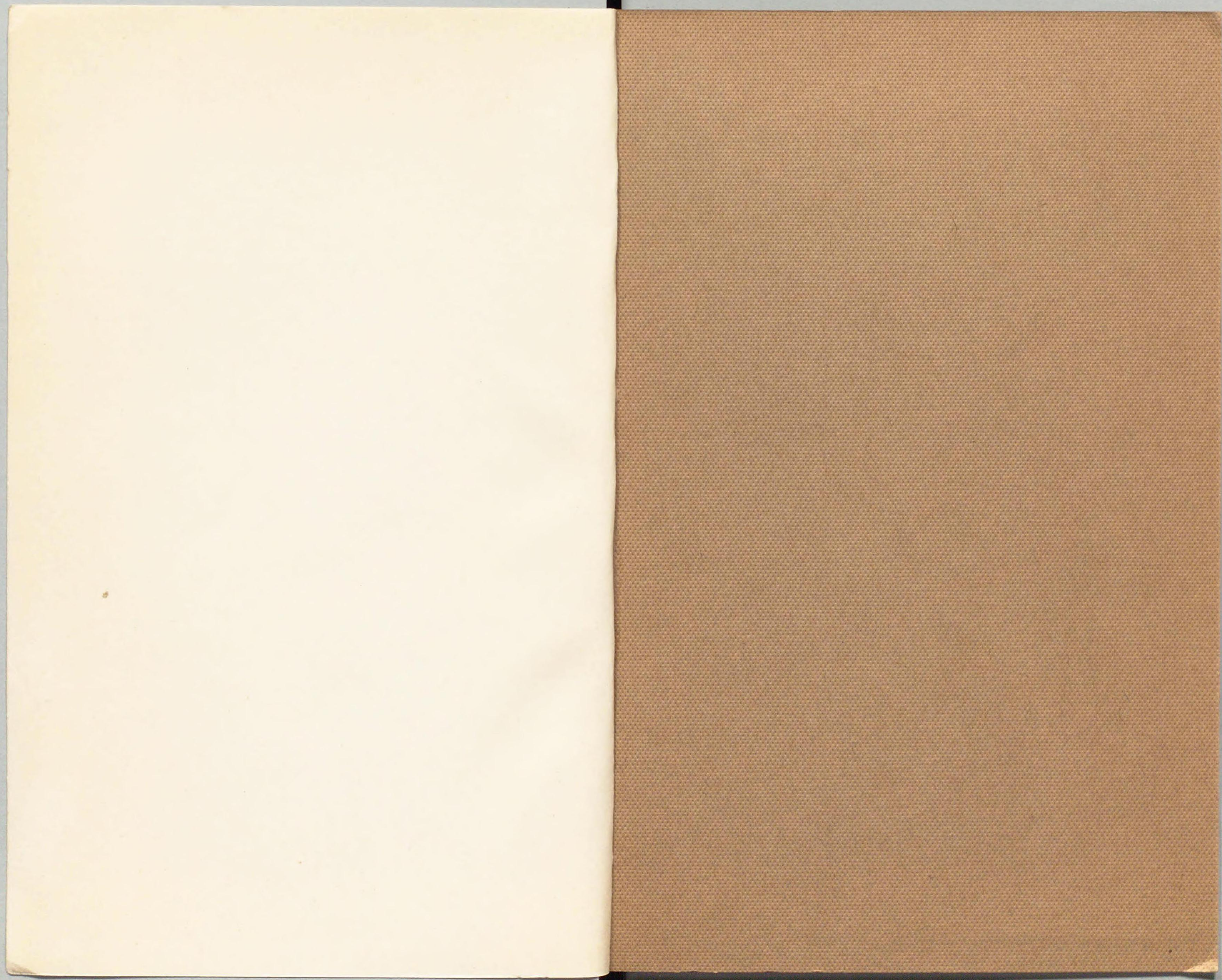
国立国会図書館

911.142
Sa197Ns



00574566





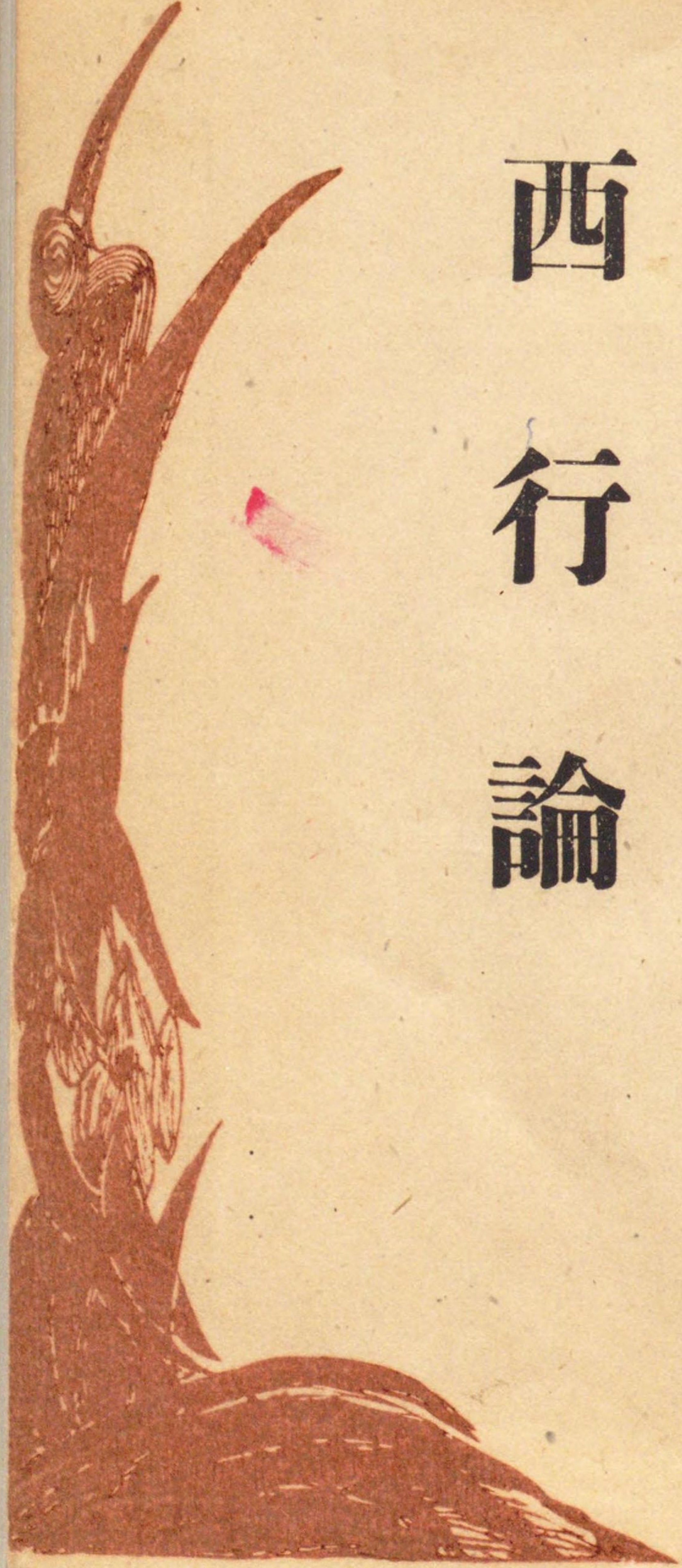
斗K-34

911.142
Sa197Ns

西
行
論

米次郎

ブックレット (第一編)



17-2519

櫻口米次郎

西行集



B-2569

西 行 論

野口米次郎

著

講談社



東京 講談社

西 行 論

野口米次郎

ブックレット

第一編



京都 富書店 刊行

254000



911.142

Sa197N



西

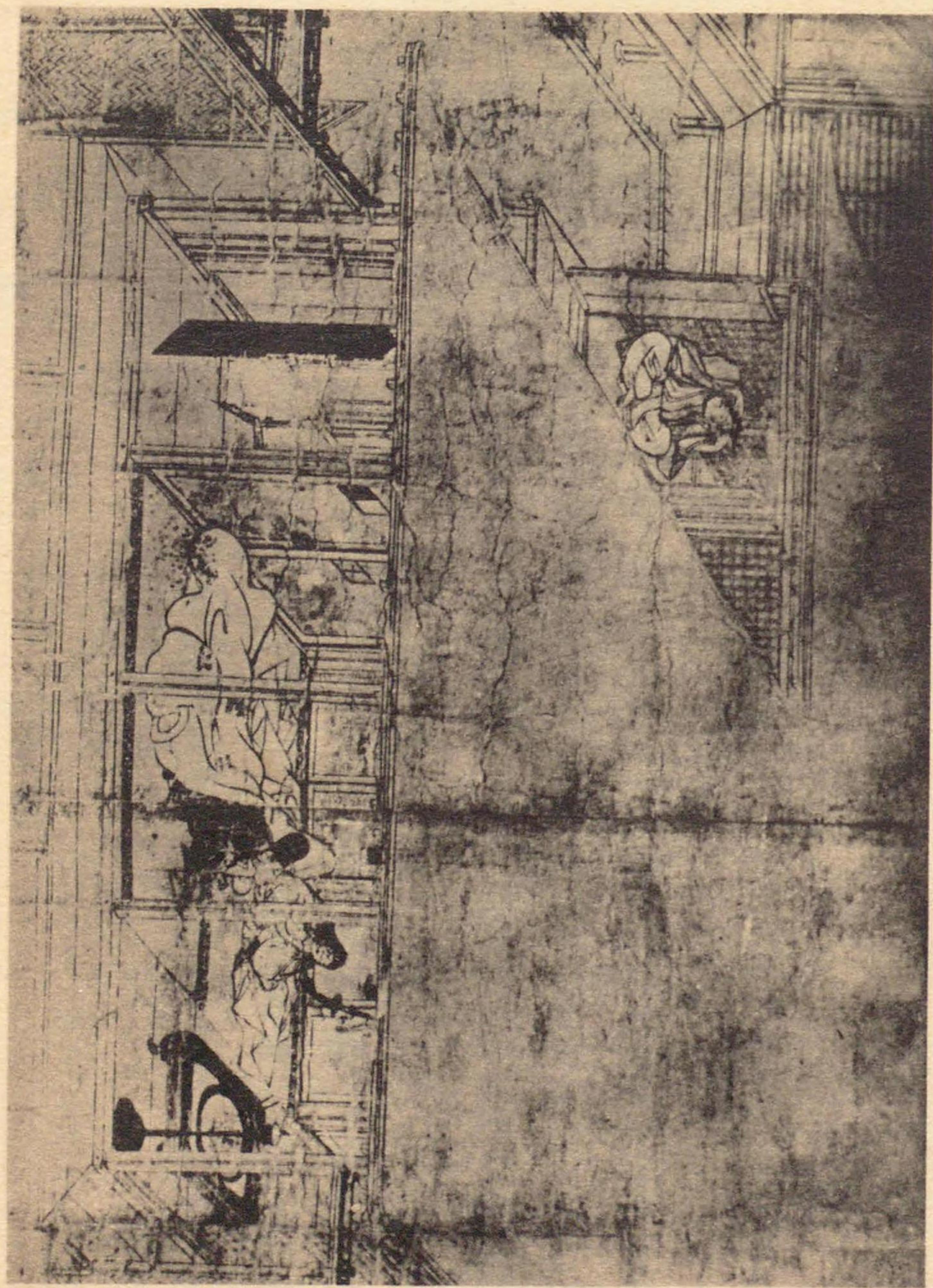


574566

271148
1917/12



374515



西行髪を斷つ (徳川義親侯所藏繪巻物)

西行論

眞實の苦悶は一變して解放となる。苦悶の涙は濟度の微光を受けて眞珠の色を放つであらう。人は苦悶に感應してその祝福を受けねばならない、而してその時即身即佛の眞理はばつと眼前に開くを見る。故に苦悶は眞理を生む母體である。

西行は月に泣いた、花に心を傷めた。これみな彼が永遠不變の理趣と、流動變轉の情景との間に彷徨ふ苦悶の姿である、いな自己解放の聲である。私は彼の苦悶に解脱の表徴を讀んで、私自身の道を求めることをどんなに喜ぶであらう。

西行の一生は外形的には見すばらしい墨染の衣一枚に過ぎなかつたが、その魂は感傷的詩の情緒と忍辱苦惱の鎔鐵爐フヤホリスとして日本の文學史を飾る最も強い最も弱い、所謂獨創的人物の一人であつた。彼は強い人間であつた……彼は二十三歳で出家して七十三歳で死ぬに至つた間、即ち

『露の玉きゆればまたもなるものを頼みもなきは我身なりけり』

と人生の果敢なきを感じ、

『願はくは花のもとにて我死なんそのきさらぎの望月の頃』

と釋迦入滅の頃の死を希つたこの二つの歌を繋ぐ一千七八百首の歌は、彼が横目も振らずに辿つた一本道の記録である。彼が強い人間でなかつたらば、どうしてかゝる執拗片意地な行爲を生活に演ずることが出来よう。彼は弱い人間であつた……彼は涙のインキで佛陀神明の姿を山

川草木の上に描いた、彼は永劫の自然から盛衰無常の現實界を眺めて泣き、又傷心悲哀の涙を自然に注いで自然を強ひて自分の悲曲に合唱せしめた。彼は厭世家であつた、もつとはつきりいふと厭世そのものを樂む厭世家で、寂しさがなくては生きていかれなかつた。日本一の泣男であつた。私は今この泣男が『鳴立澤』で踏む一人舞臺を想像する……一介の笠一介の杖の西行は花道の舞臺に近い所に立ち、遙に月の金波銀波が危い岩に碎ける清見が關を心に浮べて、

『清見瀉沖の岩こす白浪に光をかけす秋の夜の月』

と口吟む。彼の瞬間的想像は夜を日中と一變させて、眼前の富士の裾野は颯々たる松籟に波打つやうに見え、漫々たる青疊の海の上に風を孕んだ白帆が蓮歩を運ぶ。彼は頭をあげて煙立つ高根を眺め、

『風になびく富士の煙の空に消えて行くへも知らぬ我が思かな』

と口吟んで草枕旅寢の纏綿として盡さない情緒の戦慄を感じる。かう花道の思入りが済み『鳴立澤』の舞臺に入る時背景の夕日は晚鐘の響につれて沈みゆく……西行は『荻の上風身にしみて芦の枯葉のさやぎも寂しき』を覺える。舞臺一面に漲る空氣は灰色だ。舞臺と背景は渾然と

して溶けあつてまるで一幅狩野派の繪畫だ。靜寂な畫面に何か動くものが三つ四つある。それが鳴き飛ぶ……私共はそれ等が鳴であることを直感する。今舞臺の中央に立つ西行を見るとその黒い半面は輪廓がはつきり暮色を抜いてゐる、この浮彫の顔は微かに動き始める……

『心なき身にもあはれは知られけり 鴨立つ澤の秋の夕ぐれ』

ああこれぞ古今未曾有の一人舞臺である。私は未だ曾てこの鴨立澤の西行のやうに印象の深い舞臺藝術を見たことがない。全世界を通じて彼のやうに自然を支配し否自然に支配された人間の場面を見たことがない。自然は西行に向つて背景でなかつた。恰も波が海の表徴であつた時、彼は春花秋葉のうつろい易い琴線に觸れた。自然は力強い永遠性から傷み易い破れ易い瞬間的白露をこぼしゆく……西行はその一つ一つを拾つた。彼は

『歎けとて月やは物を思はするかこち顔なる我が涙かな』

その時、月は彼の悲しい戀人である、姉妹である、單に自然の一現象でなく彼と共に感情に生きる一人格である。白雲のやうに霞む春の櫻は眷々綿々たる戀愛の婦人となつて彼をとどめた。彼は路傍に立つてその人情を分つてめそめそ泣いた。彼は自然の非情の斷片を集めて悲哀

の熱い涙でこれ等を人情化して詩の世界を作つた。ああ弱い西行は強い西行であつた。彼は一度出家した以上墨染の衣と順禮者の笠と杖を捨てなかつた。行爲の人として三十一文字以外に何物にも觸れなかつた。水は必ずしも俗塵の都會を流れることを辭するものでないが決してそこに止らない。西行も出家後時には都會の人と吟詠贈答し、

『吉野山やがて出でじと思ふ身を花ちりなばと人や待つらん』

と歌ひ、又

『還りゆく人の心を思ふにも離れがたきは都なりけり』

と歌つて現實界を忘れなかつたやうであるが、都會を流れる水がするりと都會を離れ或は森林に入つた月がするりと森林を離れる如く、彼はするりと都會を捨てて再び俗塵の人とならなかつた。彼は他の幾多の特殊人物のやうに強弱兩端の世界に住んだ……この矛盾が私共に異様の興味を彼に感じさせる。この矛盾が彼を劇中の人物として最も特殊なものとした。彼が自分一人の道を歩き自分一人の言葉を語り自分一人の行爲をした時、彼は立派に劇の一人舞臺を踏んだ。前記『鴨立澤』に匹敵するやうないくつもの興味の場面を彼は演じてゐる。私共は彼を

『特殊』の一言で蔽ふことが出来る。彼が如何に人の豫期しなかつたことを演じて、如何にも彼に相應しいの感を私共に與へる。彼は語つた、彼は行つた……その言葉、その行爲が如何にも西行らしい感を私共に與へた。

「私は今『江口の遊女』の一條を語りた、高安月郊の劇『櫻時雨』の三郎兵衛閑居は、紅葉の秋を奏づる村時雨が横様に落ちる銀の絲で一幅の畫面を裝飾して紹由と吉野太夫が沸る茶釜の松風の響につれて踊る一幕であるが、この『江口の遊女』も芦の枯葉をたたき村時雨でその幕は開く。時は治承二年長月二十日餘りの頃とあるが、秋の季節でさへあれば必ずしも治承二年でなければならぬ譯はない。見すばらしい頭陀僧の小さい包を背負つた西行は、謡曲の言葉を借ると『淀の川舟行末は鶉殿の芦のほの見えし松の煙の浪よする江口の里』へ着いて一軒の遊女屋の軒口に身を寄せて雨宿りをしてゐる。撰集抄に『怪しかる賤が伏屋』とあるから障子破れ疊の古びた暖味屋であつたであらう。今しも裏座敷の危なつかしい欄干に寄つて下を滑りゆく引掛りさうにない船頭を眺めて居つた遊女は、つと立上つて家の軒口に集る陰鬱な空氣をその寂しいが艶な姿でばつと光らした。『軒に立つてはいけないよ、不景氣な……さつさと出

てください』と遊女は西行に叫んだ。西行は取敢へず、

『世の中を厭ふまでこそつらからめ假りの宿りを惜む君かな』

と口吟んだ。遊女はこれは話せる乞食坊主だと思つて、

『世を厭ふ人とし聞けば假りの宿に心とむなと思ふばかりぞ』

と西行に答へた。

場面はぐるつと半分廻ると、西行は遊女と對坐してゐる。薄暗い行燈の光は遊女の顔に落ちる……早や四十の坂を越えた姥櫻だが満更捨てたものでなく何處かに品がある。部屋の天井から下つた蜘蛛の絲は裏の川から吹いて來る微風に揺れ、驚くほど大きな綺麗な一疋の蛾は行燈を廻つてその影が破れた疊の上に落ちる。蟋蟀の小さい聲が手近な勝手口から聞えて來る。正にこれ場末の遊女の物語を聞くに屈竟の場面である。白居易の琵琶行もどきに語りだすこの遊女の物語も他の遊女の身の上話と異りはない。然し遊女が『女は殊に罪深きと承るにこの振舞をさへ侍る事げに前の世の宿習のほど思ひしられ侍りてうたてしく覺える』と語つた時、感傷詩人西行の人情の心は震へた。彼は人間生活の痛ましさに觸れて、風に揺れる蜘蛛の巣も蟋蟀

も乃至は行燈を廻る蛾も彼と共に、否彼の涙に答へて悲しい人生の悲曲を奏づるやうに思つた。然し彼が告白は即ちそれ自身が濟度の行爲だと思つた時、眼前の遊女は麗しい希望の微光で後光がさすやうに感じた。遊女は言葉を續けた……『同じ野守の鐘なれども夕べは物の悲しくてすすろに涙にくらされて侍り、この假初の浮世にはいつまでかあらずらんと味氣なく覺ゆ。曉には心の澄みて別れを慕ふ鳥の音など殊に哀れに侍り、然あれど夕には今夜すぎなば如何にもならんと思ひ、曉にはこの夜明けなば様を變へて思ひとまらんとのみ思ひ侍れども年をへて思ひなれにし世の中とて雪山の鳥の心地して今までつれなく止みぬる悲しさ。』彼女はかく語つてしやくりあげて泣いた。ここがこの劇の高潮でこの後を語る必要がないと私は思ふ。芭蕉にも『一つ家に遊女も寝たり萩の月』の句があつて、奥羽行脚の時、市振之關で『衣の上の御情に大慈の恵を垂れて結縁させ給へ』と袖にすがつた遊女をふり捨てた話があるが、西行の『江口の遊女』ほど私共の感情を動かさない。

私は撰集抄第六卷第十六のこの條を讀むと直ぐ謡曲の『江口』を考へさせられる。謡曲の面白味は現實から幻の世界を紡ぐ、即ち俗塵の世界を延長させて夢の理想へと及ばしめる點にあ

故に遊女の歌の『假りの宿に心とむるなと』の言葉を敷衍して、『地「おもしろや、シテ「實相無漏の大海に、五塵六欲の風は吹かねども、地「地隨縁眞如の波の、立たぬ日もなし、立たぬ日もなし、シテ「波の立居も何故ぞ、假なる宿に心とむる故、地「心とめずば浮世もあらじ、シテ「人をも慕はじ、地「待つ暮もなく、シテ「別路わかれも嵐吹く、地「花よ紅葉よ月雪の古言も、あらよしなや、シテ「思へば假の宿、地「思へば假の宿に、心とむなと人をだに、諫めし我なり』とあつて、江口の作者は遊女を理想化して普賢菩薩にして仕舞つて、月の夜舟の川逍遙の有様を見せて居つた彼女の船は白い象となつてそのまま白雲の彼方へ消えさせてゐる。この謡曲の最後を繪にした傑作は岩崎男所藏にかかる一幅『白象の遊女江口の君』であらう……作家應舉は自分好みの小肥りした美人に遊女を描いてゐる、精緻微細を極めた毛髪に對照させるため金銀の菱形模様を襦と帯に浮かせて見るからに平靜優雅な理想再來である。如何にも普賢菩薩の再來に相應しい女性の肖像である。私は應舉の藝術を餘り高く買ふものでないが、この一幅で彼は私に頭を下げさせる。

謡曲『江口』は月に花に自然の開落盛衰の理趣を人間生活の情景に照し合せて西行の一生を

一貫する詩境であつて、遊女が西行に語つた言葉とある『宵にはこの夜すぎなばと思ひ曉には明けなばと涙を流し侍る』の苦惱を敷衍説明したものである。西行は永劫不變の理趣と流動變轉の情景との二つの獄門にかかりその現實を取つて以て己が詩歌とした。若し江口の遊女物語が西行の眞實の經驗であつたならば、彼は前記の言葉の苦境に立つ彼女の心理状態は即ち彼の夫れで、彼は必ずや人事でないと同情の涙を流したに相違ない。然し人間の苦境は希望の彼岸に達する船賃である。故に眞實の苦悶は即ち解脱の門である、濟度の微光は苦悶の涙にその眞珠の色を流してゐる。人が苦悶に順應してその祝福を受ける時始めて即身即佛の眞理を了解することが出来る。西行の歌の大部分は苦悶者が簡單赤裸に發した悲鳴である……世界に詩多しと雖も西行ぐらゐ自己を暴露した詩人はゐない。彼は何等隱蔽する所がない、彼は日本あつて以來の最も正直無邪氣な詩人である。彼の三十一文字は佛の面前に捧げる告白である……このくらの尊い禮讚の言葉が何處にあらうぞ。彼は月に泣き花に心を傷めた……ああこの態度が自己解放でなくて何であらうぞ。彼の悲鳴は即ち人間解説の表徴でなくて何であらうぞ。彼は櫻を禮讚して、

『たぐひなき花をし枝にさかすれば櫻にならぶ木ぞなかりける』

と歌つた。西行自身も比類なき正直な歌を身に咲かせて、即身即佛の理を明かにした。

西行の江口の遊女物語はまだその後篇がある。西行は彼女に別れて再訪問を約したがその意を果すことが出来なかつた。彼は彼女に、

『假初の世には思を残すなと聞きし言の葉忘れもせず』

の一首を贈つた。遊女はその返歌として、

『髪おろし衣の色は染めぬるになほつれなきは心なりけり』

と彼に答へた。いふまでもなく彼女はその時既に出家して居つたのである。この一首の如きは極めて西行張りの和歌だ、移して以て西行自身の自責の言葉とすることが出来る。芭蕉の『西行上人像讚』に、『捨てはてて身はなきものと思へども雪のふる日は寒くこそあれ、花のふる日は浮かれこそすれ』とあるが、このくらの西行の西行たる所を道破し盡した文字はない。眞實の詩人は常に眞實の批評家である、即ち詩人芭蕉は批評家芭蕉である……この西行の批評だけを見ても優にそれを説明してゐる。芭蕉が西行の感傷的な『ものの哀れ』を心理的に或は表

微的に變形進歩させて『さび』とした點は確かに彼の大價值であるが、如何に彼が西行に私淑して居つたかは彼が死ぬまで山家集を持つて歩いたことを見ても知れる。山家集は江口の遊女の『衣の色は染めぬるになほつれなきは心なりけり』の記録に過ぎない。西行は世を捨てた、それでも春の花に冬の雪に浮かれた震へた……この煩悶を樂み生きて、彼は詩歌をして煩惱即菩薩の表徴たらしめた。西行には詩歌は宗教であつたことはいふまでもない。彼は慈圓に和歌の道を質問された時、『和歌の奥旨は密教の奥旨だ、密教を學ばないと和歌は詠まれない』と答へたとあるが、明瞭にその消息を傳へた言葉といふことが出来る。西行が『さもいみじかりける遊女にて侍る』と江口の遊女を褒めてゐるが、彼は彼女の歌に宗教を見たからである。彼女の名前は語られてゐないが、一夜の宿を彼女と共にすることを辭しないのは西行ばかりではあるまい。私は西行と共に『かの遊女の最後の有様何と侍るべき返すく床しく侍る』と思はざるを得ない。墨染の法師が青樓に寝たと聞くと不自然のやうに思はれるが、この一挿話はどうしても西行物語になくてならないものである。西行は如何に不自然な場合でも、彼は單純な詩歌の魔法ですべてのものに自然の歸着を與へてゐる。彼は日本の歴史中稀れに見る特殊の人間であつた。

二

日本ばかりでなく世界いづれの國でも所謂中世紀、殊に中世紀末期の文學は面白くない。その理由は簡單である。この時代の表現はすべての場合に個性的でない……假令個性的の場合があつても、それが萎靡廢頽に傾いてもう一息といふ所で止まつてゐる。譬へると赤裸な蠻性を捨てた少年のやうなもので特殊な個性を發揮するには間のある中途半端の時代である。若し私共に中世紀に興味があるとすると、私共はそれを一般の社會的見地から見ねばならぬ……少くもその時代の人間はみな類型的で一つの感がある。勿論中世紀の人間が同時代の生活世相や思想をながめたならば彼等は様々の變化を見出したに相違ないが、時代を遠く離れた今日の私共には、恰も遠方の海が一枚の廣い疊の如くに見えるやうに、それ等の起伏凸凹を見ることが出来ない。従つて如何なる國の中世紀でも色彩がない、假令色彩があつてもそれは稀薄で私共を

力強く引付けない感が多い。

今日日本の歴史で平安朝末期以降、特に西行が生きた所謂院政時代から鎌倉末期に至る間を考へると、矢張り前記批評の範圍を離れない。英邁な後三條天皇は横暴な藤原氏の權力を取つて壓へたが、次の白河鳥羽の兩帝が奢侈と逸樂とを喜ばれたがため宮中を氣の抜けたやうな、和歌と見ては綺麗な容儀のバザーとして仕舞はれた。源氏平家が京都を淋漓たる赤い血で彩り町から町へと恐ろしい刀や鎗や矢で野蠻な行進曲を奏して歩いた間でも、所謂月卿雲客は怡も戸をばつたり閉ぢた蝸牛のやうに御所の塀の内で姑息の安を食つて平氣で暮らした。その後源頼朝が幕府を鎌倉に開いて國の政體が一變しても、彼等は意氣の沮喪した蝸牛生活を破るの力もなく又その機會も與へられなかつた。彼等が消閑の道具、即ち暇潰しに和歌を口吟んで居つた有様は、丁度花合せして居つたと同様であつた。私共はかういふ人間から眞實の文學が望める筈がないのは當然である。眞實の文學は眞實の生活から生れるといふことは古今東西を論ぜず一定不動の原則だ。それ等の月卿雲客に眞實の生活がなかつた、即ち眞實の文學がないことになつたのである。私は何も故意に彼等を罵倒して喜ぶものでない。私は彼等が負け將棋のや

うに段々とかかる運命に追詰められて行つた事情を寧ろ憐れむものである。そもその最初を考へると、彼等が東山大堰川を美風景の最大なるものとした京都數里の間を極樂淨土として月雪花の生活をしたといふことは、確かに彼等の生活の更新であつた。人生の新発見であつた。然るにそれが傳習となつて彼等の生命を銷磨した時、彼等は云はば自繩自縛のつまらない悲劇を演じたのである。彼等は己が作つた罫圍氣で窒息するに至つたのである。私は如何なる國の中世紀でも色彩がないといつたが、彼等に最初は人を驚かすに足る色彩があつた。そしてその色彩が漸次に消滅して行つたのである。たとへると彼等は色の褪せた烏帽子や指貫のやうなものになつたのである。

然しこの間にあつて大いに氣を吐く人間が一人居つた。それは外の人でない西行だ、世にありし日の鳥羽院下北面の武士佐藤義清だ。彼の系圖を案するに彼は藤原房前の子魚名の末流、依藤太秀郷が九代の後裔で、父を康清と云ひ母は監物清經の女であつた。して見ると彼は由緒正しい弓矢の家に生れた男だが、年二十三歳の時彼は手に握つた所謂將來なるものをかなぐり捨てて自分丈けの住む獲自の世界を作つた。二十三歳と云へば男子意を決すべきの私だ。乃ち

彼は意を決して自己創造の別世界に入つた……ああ、この西行またの名圓位法師の世界は掛値なしに自由の世界であつた。彼の時代の上に立つた人間は二つの階級に屬さざるを得なかつた。一は『櫻かざして今日も暮しつ』の遊惰な堂上人階級と、他は狹量な黨派氣質を軍馬の蹄で叫ばした武人階級であつた。この二つの階級の外に價値のある生活はないと思はれて居つた時代に、西行が別に大きな一新世界を作つて住んだといふことは偉大な行爲と云はねばならぬ。彼は自分丈けの世界に生きて、前にいつたやうに中世紀が失つた『赤裸な蠻性』を取返した。彼は中世紀の無個性の中途半端を離れて特殊の生活を發揮した。日本に詩人や英雄の數は多いが、西行ぐらゐ無束縛の生活に生きた人間はゐない。彼ぐらゐ自由の何物たるを味つた人間はゐない。彼あつて始めて日本の中世紀に類型的でない人間が一人居つたことを誇ることが出来る。『行雲流水』といふ言葉があるが、西行の生活は正にそれであつた。然し彼はどうして實際生活の法則に掣肘されない自由の生活をする事が出来たか、もつと簡単に云ふと、彼はどうして出家後の飯を食つて來たか……今日この點を詳細にする記録がないが、恐らく彼はその後芭蕉の如く返済しなくてもいい程度の借金を人にしたであらう、感謝しなくてもいい程

度の厄介を人にかけてであらう、又人から歌の謝禮を貰つたであらう、罪にならない程度の無責任な讀經に對するお布施に預つたであらう、人の軒の下に立つ乞食をしたであらう。寺から寺へと宿つて歩いたであらう。然しかかる家無しの風羅坊生活も今日私共が想像するやうに不安な生活でなかつたかも知れない。若しこの一笠一杖の頭陀僧生活が事實上に苦しい生活であつたならば、如何に西行と雖もその不安な生活状態を五十年の長年月に渡つて堪へることがどうして出来よう。

芭蕉が奥之細道に『月日は百代の過客にして行き代ふ年も亦旅人也。船の上に生涯を浮べ、馬の口捕へて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を棲所とす。古人も旅に死せるあり。予も何れの年よりか片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひ止まず、海濱にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘蛛の古巢を拂ひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關越えんと、そぞろ神の物に憑きて心を狂はせ、道祖神の招きに會ひて取る物手につかず、股引の破れを綴り、笠の緒着け替へて、三里に灸するより松島の月先づ心にかかりて、住める方は人に譲り杉風が別墅にうつる』と書きだした時、彼は確かにその心に西行の無錢旅行を浮べたに相違ない。この旅行で

彼が越前の境吉崎といふ所で汐越の松をながめて、西行の

『終夜嵐に波をはこばせて月をたれたる汐越の松』

をあげて、『數景盡きたりもし一辯を加へるものは無用の指を立るがごとし』といつてゐる。また路通が還俗したことを聞いて曲翠に送つた彼の手紙の文字にも、『その志三年以前より見えたる事に候間驚くに足らず候とても西行能因が眞似はなる間敷く』とあるのを見ると、芭蕉は西行を理想とし西行の生活を詩人生活の模範と思つたであらう。『柴門辭』の中にも『只釋阿西行の詞のみ假初に云ひちらしあだなるたはれごとくも哀なる處多し後鳥羽上皇の書せ給ひしものにも此等は歌に實ありて而も悲しみをそふるとの給ひ侍りしとかや』とあつて、何にかにつれ西行のことを語つてゐる。私はここで西行と芭蕉の比較論をするのではなく、彼等が共に自然により近く接觸する放浪生活に人間本來の面目がある眞實の詩歌がそこから生れると信じた點を指摘する。人間は城郭にもぐり込んで自然を離れ、風や水などの聖饗共受を否定した罪に問はれて次第に腐れゆく。然るに西行、宗祇、芭蕉の如き『眼に見えぬ神の御手に招かれてそよ吹く銀の風の如く聖き空をめぐつた』放浪の自然兒は、山川草木を解脱の表徴として禮讚し

たがため彼等は永劫に自由である。その生命は永遠に新しい。浮動變轉は宇宙の方則である。この方則に生きる旅人生活は則ち菩提の生活である。決して弱者の生活でない、實にその生活そのものが懺悔である、そして懺悔が詩歌である。

芭蕉時代の旅行も今日のやうに樂なものではなかつたが、それを昔に溯つた西行の漂浪旅行が如何に冒險的のものであつたかは容易に私共が想像する所である。西行は殆ど全國に渡つて山川を遊覽した……その遊覽が非常な忍耐の報酬であるから尊い。今彼の足跡を詳細確實に知ることは出来ないが、私は諸書の語る所を綜合して彼の生活をしのびたい。

そもそも花の吉野山は七世紀の末開役の小角の開いた所で、奥の院の大峯山と本堂の藏王堂に附屬する堂塔僧舎を總稱して金峯山寺といつてゐる。山澤を拓いて自然と人間との津梁を架することは佛へ服務の道だと信じた古代の僧侶に、この山へ櫻樹を植付けることぐらゐは何でもなかつたであらう。今日の私共には、『歌書よりも軍書に悲しよしの山』として、また『眉雪老僧時止掃、落花深花深處說南朝』の遺跡として有名であるが、平安朝時代の大宮人達はこゝへ遊山して今日の如く俗化しない以前の花の新鮮な姿を見たであらう。然しその頃の人々が

後鳥羽院の歌にある如く『嵐もしろき春の曙の落花』を賞美して居つた時に、西行は

『眺むとて花にぞいたく馴れぬれば散る別れこそ悲しかりけれ』

と花に悲哀を見出したといふことは彼の新発見であつた。西行が出家後何程の月日を経て吉野入りをしたかを私は知らない。撰集抄に『山の有様、花の色、木々の姿、處の靜なること都にて思ひやりしには猶まさり面白く侍りき、ならのはまではこちたき深山の嵐の花の末によはり、櫻は雪に咲きかけり行くさま珍らかに侍り、上下の御前安禪寶塔の所有様、心なからんすら見過ごし難く侍るべし、さればこの所は心にも止まりしままに三年を過ぐし侍りき』とあるから、彼は三春の花をここで眺めた……

『吉野山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬ方の花をたづねん』

と口吟んで人跡未踏の花を賞したり、又花が散つて仕舞へば京都の空をながめて人里戀しいの感に打たれた。西行は果して金峯神社を右へ五六町入つた山懐にある今日所謂西行庵住の舊址でこの三箇年を暮したであらうか。彼が

『とくとくと落つる岩間の苔清水汲ほす程もなき住居かな』

と歌つた苔清水は庵の手前に今も流れてゐる。芭蕉はここへ来て『露とくとくこころみに浮世すすがばや』といつたが、此處ならば彼等の好きさうな閑寂な一境である。

西行の吉野入りの頃は京都を矢叫び鬨の聲の修羅場とした保元平治を前に溯る十幾年の時ではあるが、眞夜中に既に曙の微動を感じるやうに、洛中一般の空氣は陰鬱不安で何か將來の悲慘を暗示する所があつたであらう。『この世をばわが世とぞ思ふ望月の』の藤原氏の歡樂榮華は亡びたけれども、一度破壊された皇室の威嚴は到底完全なものとなる理由はなく、御所を中心として生きた大宮人達は過去の夢と宗教の妄信のため明瞭な理性を失つて恰も暗い陰影の夜へ落ちるの感があつたに相違ない。詩人の感性は天津橋上で杜鵑一聲を耳にして戰亂を豫想する……假令詩人でなくても、彼が順良な心ある人間であつたならば、必ずやこの不愉快な現實の恐怖を逃れて憧憬の理想を何處かに求めようとしたであらう。この時彼が佛門に入つて大慈大悲の法味を受け光明の遍照に觸れて人生の變動を永劫の不變と變化させようとしたのは極めて自然の行動である。恐らくこの時代に人生の轉身策を佛の法悅に見出したものは西行ばかりではなかつたであらう。撰集抄中に『吉野の三世不可得觀の僧侶』のことが書いてあるが、

この人も西行式の一人であつたに相違ない。江口の遊女と同様にその名は傳つてゐないが、倫理の廢頽時代には隠れた求道者が多いものだ。

西行は世がいよいよ亂れて保元の血の池地獄と顯れたのを見た時、彼は世外の放浪坊主としてかかる無道の悲劇に對し何等の干與者でないことを如何に喜んだであらう。久壽二年近衛天皇の崩御について鳥羽法皇御他界あらせられた：西行は鳥羽殿落成の際歌を奉つて御劔を頂戴したことを徳としてゐる、彼は法皇の御寵愛を蒙つた。彼はその當時高野にあつたが偶然に下山して法皇の御大葬に會ひ、

『今宵こそ思ひしらるれ淺からぬ君に契のある身なりけり』

又、

『道かはる御幸かなしき今宵かな限りの旅と見るにつけても』

と悲歎の涙にくれた、彼の悲歎はこれで止らなかつた、彼は御大葬の哀歌の征鼓の叫びが續いて起るのを聞いた：左大臣賴長は流矢に中つて倒れた、源爲義は殺された、崇徳新院は讃岐に遷御ましますに至つた。保元の亂につづいた平治の亂は京都を一層悲惨の巷と化した：藤

原信賴、源義朝は戦争に敗れた、平清盛は勝利者の勢力を得た。住吉慶恩筆平治物語の中で最も傑出してゐる院の御所三條殿夜討の巻を見たものは、如何に殿舎が燃え宮嬪が叫喚し兵士が走つたかの酸鼻な有様を容易に想像することが出来る。『御所には軍兵四方を打ふせぎ火を放ちて、洩出づる者をば射殺し切殺す、若しや助かるとて井にぞ多く落入りける、上下の女房局の女のわらべをめき出びて走り出て倒れ伏す、馬に踏まれ人に踏まる、淺猿しともいふばかり無し』とこの繪巻物の言葉に書いてあるが、この實際を見たものは前大納言成通のやうに遁世を欲したであらう。西行は出家した成通に、『いとふべきかりのやどりはいでぬなり今はまことこの道を尋ねよ』の一首を贈つてゐる。恐らく彼はその時、『それ見たことか云はないことではない』の感を持つたであらう。讃岐に流され給ふた崇徳上皇は歌人である。天養元年の撰集左京大夫藤原顯輔の詞花集にその御製が六香も入つてゐる。西行は敷島の道の運命はこの上皇の雙肩にかかつてゐると思つて居つたであらう。上皇が讃岐に遷御されました時彼は、

『言の葉の情たえぬる折節にありあふ身こそ悲しかりけれ』

上皇は保元の亂後五六年目に讃岐の配所で憤懣のうちに崩御し給ふに至つたが、この悲報に

接した西行が如何に悲歎にくれたかは想像に餘りある。彼は今紺叢濃の直垂に唐綴緘の鎧を着て重籐の弓を持つ武士でない。彼は大中黒の矢を負つて澤山の郎侍を従へる仙洞御所の佐藤義清でない。彼は墨染の衣を身に纏つて山野を放浪する西行であつて見ると、彼は上皇の崩御を自分ひとりの悲みであるやうに感じ、如何に彼はその菩提を弔つたであらう。時に西行年五十年前であつたが、私はすつと溯つて彼の吉野庵往三年後からつづいて私の物語を續けたい。

西行は吉野を後にして熊野參詣の旅に出た。彼は紀州千里の濱で一夜を明かして那智の御山に着いた。彼は和光同塵の垂迹、平方便の利生、八相成道の果證、般若妙法の法施、眞言秘密の法樂、臨終正念、往生極樂のためとてその千手觀音の瀧に入室して禮拜の日を送つた。彼はその上ある二三の瀧を眺めて後、南房僧都といふ先達に伴はれて大峯登山へ出發した。季節が秋であつたから夜は月を賞し、晝は老杉古檜の間を彩る紅葉を眺めて行者返しといふ第一の難關も無事に越え、三重の瀧を過ぎ深山の岩屋に籠つて、『烈々たる明王の火炎に我が罪障もうせたりと覺えて』とあつて、

『露もらぬ岩屋も袖はぬれけりと聞かずは如何にあやしからまし』

の一首を口吟んだ。それより彼が大和の國境に着くと、山村水郭の田野に山鳩の鳴くのを聞いて、

『古畑のひばのたつきにゐる鳩の友よぶ聲のすぐく聞ゆる』

と歌ひ、いよいよ里へ着いて安養淨土の望を就げたと有難涙を流して先達と別れた。彼はその後津の國の住吉へ參拜したが、道すがらの所謂名所靈蹟を訪れた。住吉で波が松を洗ふ有様を、

『古の松のしづえを洗ひけん波を心にかけてこそ見よ』

又、

『住吉の松の根あらふ波の音を木梢にかくる沖つしほ風』

と歌つて彼はここで一冬を過した。住吉明神は謡曲の文字を借りると、『忝くも西の海青木が原の波間よりあらはれ出でし』和歌の神様である。西行はここで、『岸うつ波も松風も颯々の鈴の聲ていとうの鼓の音』を聞きながら、明神へ誓約を興へその保護によつて、『歌は陰陽二つの道を守るその句を分つて五體とす、水火木金土なり、上下は即ち天地人の三才の秘密』を

學ぼうとしたのであらう。謡曲の『雨月』はこの西行訪問と撰集抄第三卷第十八の『賤が伏屋』の條を經緯として書いたもので私に一入の興味がある。これは私の好きな一篇で、恐らく最も詩的なものの一つであらう。假令この『賤が伏屋』が後世の作り話であつたにしても、かういふ工合に詩的に敷衍されると物語の精神が面白く躍動して來る。

私は西行の住吉訪問から横道へそれたが、彼の歌心は過去數年に渡る山林放浪のため一段と澄み清められて、彼は再び京都へ歸るに至つた。彼の不在中京都に様々の變化があつて有爲轉變の感を彼に與へた。西行が振り捨てた妻子の門邊へ佇んだといふ挿話もある……その時八九歳ぐらゐになつてゐた彼の娘は、立部から前庭の花を見て居つたが汚い乞食坊主を見て内へ引込んだといふことである。

西行は涙に咽んだが彼女を呼びとめることも出來ず、そのまま昔の自分の家を立去つたといふことである。彼は京都の何處に住みどうして生きたかは知る由もないが、崇徳上皇が讃岐で崩御あらせられた頃は、京都と高野とを往來して居つたに相違ない。彼は應保元年の頃高野に住んで、その年崩御あらせられた美福門院の御骨を高野へ迎へ、『今日や君おほふ五つの雪は

れて』の一首を詠じてゐる。西行は血の雨を降らした保元の亂に親子兄弟相争ふといふ人倫の廢頽を見た。彼はそれに續いて起つた平治の慘狀を見て、如何に現實世界の住むに堪へ難きの感に打たれたであらう。

三

崇徳上皇が讃岐へ遷御させられた前、意ならずも御髮を剃つて御室の仁和寺においでになつた。西行は上皇に召されて御前に侍り、『厭離穢土の次第、有爲無常の論理、成佛得道の因縁往生極樂の證跡』を詳しく言上した。上皇は彼に『われも同じ蓮の身とならん爲に月の百首を詠まんと思ふ』と仰せられた時、西行は月十首を上皇に奉つた。

上皇が『都には今宵ばかりぞ住の江のきし道おりぬいかでつみ見し』との御歌があつて泣き叫ぶ女房達に別れ、草津から御船に乗せられ讃岐の松山へ入らせられた後の物語は、實に悲惨の極みである。

かくて崇徳上皇は長寛二年八月二十六日御年四十六歳で崩御せられ、白峯山上一片の煙と化せられた。上皇が讃岐へ下られて以來西行の同情は悲歎高潮して、その熱烈な感情をいくつもの歌に述べてゐる……

『ながらへて遂に住むべき都かは此の世はよしやとてもかくても』

『まぼろしの夢を現に見る人は目もあはせでやよを明すらん』

『其の日より落つる涙とかたみにて思ひ去るる時のまぞなき』

西行は一念上皇の涙をのみ給ふての臨終を考へると、滂沱たる夜半の涙を流さざるを得なかつた。彼は仁安三年十月十日四國遍歴の旅に立つたが、その主なる目的はいふまでもなく上皇の御墓に参拜してその跡を弔はんとすることであつた。出發の前彼は賀茂の社へお別れのため参詣したが、社内は木の間を洩れる微光の月に照らされて神寂びた感に打たれ、

『かしまるしでに涙のかかるかな又いつかはと思ふ心に』
の一首を詠んだ。

彼は松山に着き上皇が幽閉遊ばされた海岸近くの山上の小屋はと見るに、岸打つ浪に亂れる

濱千鳥の聲が悲しく聞えるのみで何の跡方もない。西行はこの餘りの御有様に悵然たらざるを得ない……彼の歌に、

『松山の波の心は變らじをかたなく君はなりましにけり』

彼は低徊願望ここを去ることが出来ない。彼は眼前の波濤のやうに百感が交々胸中に捲きかへるのを感じた……そもそも西行出家の主家徳大寺左大臣實能は鳥羽法皇の皇后即ち崇徳上皇の御母待賢門院とは兄妹の間柄であつた。御外戚に主従の関係であつたことが崇徳上皇と西行とを親しく結びつけた。そして彼等は詩歌を生命とする感情の人であつた。今西行は上皇幽閉の形なき跡を彷徨して、如何に上皇の保元の御企ならず一戦敗れて仁和寺で剃髮姿を曝されたかを考へる。西行はその時、

『かかる世に影もかはらずむ月を見るわが身さへ恨めしきかな』

と歌ひて、如何に彼の心が隈なき月光を眺めて亂れたであらう。

待賢門院御繁昌の時代は西行の懐しい追憶である。鳥羽院北面の武士として彼の生活は華麗なものであつた……蹴鞠の催、南庭の御弓、さては四季折々に侍つた酒宴、鳳闕に坐して清涼

殿の紫雲を望んだことや紫宸殿の夜を守つて、曙を迎へた時朝日の見事であつたことなど、どうして彼は忘れることが出来よう。特に彼に憶出の深いことは鳥羽御所の御障子の繪に歌を賛して一代の名譽を博したことである。初春の山に谷川の流れる繪に、

『降りつみし高根のみ雪とけにけり清瀧川の水の白波』

と、世捨人の籠る柴の庵を梅の花が飾る繪に、

『とめこかし梅さかりなる我が宿を疎きも人は折にこそあれ』

と、今を盛りと咲きこぼれる櫻樹の下で人が月を眺める繪に、

『雲にまがふ花の下にて眺むればおぼろに月も見ゆるなりけり』

と、夏の初め山野を分けて時鳥を尋ねる繪に、

『聞かずともここを瀬にせむ時鳥山田の原の杉の村立』

と、時鳥の血に鳴く聲を始めて聞きつけた繪に、

『時鳥高き峯より出でにけり外山のすそに聲のきこゆる』

と、女房が清水に影を投げる柳の傍に立つ繪に、

『道の邊の清水流るる柳影しばしとてこそたちとまりけれ』
と、秋風に揺れる草葉の露のしげき繪に、

『あはれいかに草葉の露の氷るらん秋風立ちぬ宮城野の原』

と、柴の庵近く鹿の鳴く繪に、

『小山田の庵近くなく鹿の音に驚かされておどろきにけり』

と、月影が嵐に誘はれる小倉山の紅葉に落ちる繪に、

『小倉山ふもとの里に木の葉ちれば梢にはるる月を見るかな』

と、雲が高い山にかかり時雨來らんとする繪に、

『秋しのや外山の里やしぐるらん伊駒の岳に雲ぞかかれる』

との十首を彼は奉つた。彼は今『道の邊の清水流るる柳影』の外さほど人を驚かせる作とは思はないが、人世の苦惱を體驗した今日の西行では到底詠ずることの出来ない新鮮麗な姿がそれぞれにあると思はざるを得ない。その時彼は朝日の御劔を頂戴した……殊に嬉しかつたのは中納言の前で、目もさめるやうな紅の十五重の御衣を賜つて肩にかけて貰つたことである。そ

の頃の中納言は嬋妍たる美人であつた……それを今日小倉山引退の姿に比較すると何たる相違であらうと西行は思ふ。西行は都出發前に彼女を訪ふてその女僧姿を哀れに思つて、

『山おろす嵐の音の烈しきにいつならひける君が住家ぞ』

と詠んだ。彼女は、

『憂き世をば嵐の風に誘はれて家を出でにし住家とぞ見る』

と彼に答へられたことを心に浮べる。彼女の住家は前は野邊、後は山路で、白露しげき葛や尾花で埋もれ、枝に通ふ萩の上風や寢屋に音づれる松の嵐を聞いて如何に待賢門院御在世の時をしのばれるだらうと思ふと、西行は熱い涙が頬に落ちるやうに感ぜざるを得ない。然し彼女の昔に變らない優しい心ばへは實に感服の至りだと彼は喜んだ。中納言を思ふにつけて忘れられない女房は堀川である……彼女は『長からん心も知らず黒髪の亂れて今朝は物をこそ思への』作者だ。西行の、

『尋ねとて風のつてにも聞かじかし花と散りにし君が行くへを』

の歌に、彼女は、

『吹く風の行くへ知らする物ならば花と散るにもおくれざらまじ』

と答へた。かう待賢門院御一門並にその眷顧を蒙つた人々の榮華の夢がさめ果てた今日泣くことぐらゐ心を慰めることはない。西行は思はざるを得なかつた。

今西行は崇徳上皇の御墓があるといふ白峯を登つてゐる。『松柏は奥ふかく茂りあひて青雲のたなびく日すら小雨そぼふるが如し、兒が嶽といふ嶮しき嶽背に聳えだちて千仞の谷底より雲きりおひのほれば咫尺をもおぼつかなき心持せらる』と、雨月物語の『白峯』にある情景である。西行は誰訪へとか呼子鳥の聲に驚き、寂しさに堪へられない猿に答へながら道のない山路を登つて、木の間の小高い土の上に石が三つ疊みかさねてある所へ着いた……ああ、これが嘗て一天萬乗をしろしめした上皇がこの世に残された御跡かと思つて、彼は熱い涙にくれた。西行はかく九五の御位を踐んだ御人でも最早や有りし世の不平不満に捕はれて迷つてはいけな、往生安樂の法悦に入つていただきたいと物語り、落ちる涙と共に左の一首を上皇の靈に奉つた。

『よしや君昔の玉の床とてかかからん後は何にかはせん』

萬斛の血涙を恩人の上皇の悲しい運命に泣く時西行は感情の詩人である。然し彼が理性の人にかへる時、彼は目を閉じて上皇の行爲を是認することが出来ない。彼は心のなかで何故に上皇は人慾の懊惱を支配し得ず徒に保元の亂に都の平和を破壊し給はつたかを恨まざるを得ない。彼は上皇は彼と等しく自然禮讃を解脱の道とすべき歌人ではなかつたかと思はざるを得ない。彼は前記の歌で佛果圓滿の位に昇り給へと歌つたのは、臣として過去の罪を問ひたくないからである。然し彼はその語調に彼の多少の激した心を匿すことが出来ない……彼は再び感情の詩人にかへつて、あら勿體なしの感に打たれるやうに思つたであらう。

上田秋成は『白峯』一篇で、西行を上下に燃えあがる陰火の間に坐らせ、彼を『朱をそそぎたる龍顔に荆の髮膝にかかるまで亂れ、白眼を吊りあげ、熱き嘘を苦しげにつかせ給ひ、御衣は柿色のいたうすすびたるに、手足の爪は獸のごとく生のびてさながら魔王の形あさましくもおそろしい』崇徳上皇の幽霊と對面させてゐる。秋成は保元物語の『新院御經沈めの事』から想像を弄し、『怨念晴れやらで天狗にならせ給へり』といふその當時の風説を敷衍したものが、西行と上皇との對話は躍動して日本文學中稀れに見る所の奇觀である。『一院崩御したまひ

て殯の宮に肌膚もいまだ寒させたまはぬに、御旗なびかせ弓矢ふり立て御祚をあらそひ給ふは、不孝の罪これより劇しきはあらじ。天下は神器なり。人のわたくしをもて奪ふとも得べからぬことわりなるを、たとへ垂仁王の即位は民の仰ぎ望む所なりとも、徳を布き和を施し給はで、道ならぬわざをもて代を亂したまふときは、きのふまで君を慕ひしも今日は忽ち怨敵となりて、本意を遂げ給はで、昔より例なき刑を得給ひてかかる鄙の國の土とならせ給へり』と、西行の追求はいよいよ急である。上皇の靈は、汝の理論はさることながら敵の無慈悲な態度を怒つて死んで大魔王となり今三百餘類の巨魁であると仰せられる。平治の亂も朝家への祟も豫定の行動で、『只清盛が人果大にして親族氏族ことごとく高き官位につらなり、おのがままなる國政を執行ふといへども、重盛忠義をもて輔くる故いまだ期いたらず、汝見よ平氏も亦久しからじ。雅仁朕につらかりしほどは終に報ゆべきぞ』と上皇は仰せられる。上皇は天に向ひて誰かを呼ばれると、はあと答へて化鳥が飛んで来て彼の前にひれ伏す……上皇は化鳥に『何ぞはやく重盛が命を奪つて雅仁、清盛を苦しめざる』と仰せられると、化鳥は答へていふ、『上皇(雅仁)の幸福いまだつきず重盛が忠信ちかづきがたし、今より支干一周を得ば重盛が命數既に

つきなむ、彼死せば一族の幸福此時に亡ぶべし。』この時西行は餘りに魔道の淺ましきを見て前記の歌一首を奉ると、上皇の幽靈は成程と合點されて化鳥と共に消え失せる。西行は程なく明ける朝の空に鳥の聲を聞いて、更に金剛經二卷を供養して下山するのである。

西行は白峯を下山してから善通寺へ參詣して寺の南大門の前に庵を結んだ。門内の東側に老松一株があつた、西行が都へ歸る時その名残を惜んで、

『久に經て我が後の世をとへよ松跡しのぶべき人もなき身ぞ』

と詠んだ。彼は幾年間四國に滞在したか不明であるが、承安元年六月後白河法皇が熊野詣の途次佳吉へ御幸があつた時彼もそれに出會つてゐるから、勿論その頃に彼は京へ歸つて居つたに相違ない。その時『後三條院のみゆき神も思ひ出給ふらんとおぼえて釣殿に書付侍し』と前書して、

『絶えたりし君がみゆきを待つて神いかばかりうれしかるらん』

と歌つてゐる。推察するに西行はこの和歌の神へ拂ひ給ふた法皇の揖禮に、崇徳上皇崩御と共に亡びたと思つた詩歌の復活を認めて喜んだのであらう。

彼が四國遍歴へ出發した仁安三年は高倉天皇が大極殿で御即位あつた年である。天皇の御生母は入道淨海の北の方八條の二位の妹である。自然の結果として宮中府中に於ける平氏の勢力は、恰も東天の太陽の如く隆々として榮えんとして居つた。そして西行が旅から歸つてみると平氏の知行は三十餘ヶ國に及び、庄園田畑また幾程なるを知らずで、『平氏の榮華は今を盛りとぞ見えし』といふ有様であつた。時代は廻り燈籠のやうに動く……承安四年に義經は鞍馬山を脱して秀衡に投じた。法性寺の執行俊寛、丹波の少將成經、平判官康頼の三人は鹿谷に會合して平氏滅亡を計つて治承元年に鬼界ヶ島へ流された。天皇の中宮は毎夜御物氣に取りつかれ始められた。西行は治承四年に福原遷都の報を伊勢で聞いて。

『雲のうへやふるき都に成りにけりすむらん月の影はかはらで』
と歌つてゐる。

西行は都會人である。都會人の價值はどこまでも主我主義者の禮節を守つて環境の惡影響を巧に逃れる點にある。その心理状態は生一本で明瞭である。都會人はその生活を整理して人間本來の生氣を浪費させない、故に彼の作る景圍氣は中心へと集まる……彼はこの陰氣な薄暗い

寡圍氣のなかで微笑する。彼は武者振り若々しく現實の野卑を呪詛する。私は嘗て『都會人は心の伊達者の態度で野卑に對して悲痛な戰鬪史を書き、彼は己が主義に殉ずる一國者だ』と書いたが、都會人ぐらゐ現實に執着する人間はない、即ち呪詛しながらそれを忘れることが出来ない運命を持つてゐる。西行は都會人である……都會人の運命として京都を忘れることが出来ずに幾度も旅から京都へ歸つてゐる。彼は何を求めに京都へ歸つたか、他なし、彼は現實の野卑を呪詛せんが爲に歸つた、彼は悲觀論を一層明瞭ならしめんが爲に歸つた。そして彼は悲觀論を宗教の神祕主義で肯定してゐるが、彼の宗教觀は矢張り都會人の宗教觀であつて、どこかに一種不思議な爽快味がある。云ひ替へると彼は悲觀を樂み、即ち涙を樂んで泣いてゐる。彼は『寂しさなくばうからまし』の人間である。由來都會は悲しい所である。今日の東京でも倫敦でも巴里でも乃至は紐育でもさうであつて、必ずしも西行時代の京都ばかりの問題でない。然し私は幾年振りに四國遍歴から京都へ歸つた西行を想像する……彼のお主筋は殆ど滅亡してその跡を止めない。今彼は帝闕も仙洞も及ばない入道相國一家の豪奢生活を見て何と感じたであらうか。彼は直にそれに驕るもの久しからずの理を讀んで、彼等を嫌ふよりは寧ろ悲哀の心

で彼等を眺めたであらう。彼は久方振りて京都へ歸つたが、彼は京都に住むことが出来ない。そこで彼はまたもや放浪の旅に出たのである。

西行は四國遍歴の次に西國修行の旅に出てゐるらしいが、私は治承四年伊勢に於ける彼を想像したい。彼は『雲のうへやふるき都に成りにけり』と歌つて月卿雲客の都は亡び、紫宸清涼の詩歌管絃は再び聞くことが出来ないと思つたであらうか。假令邪雲が千年の御所を蔽つてもいつかはその神徳を完全に發揮する時が來ると彼は信じたであらう。彼が、

『宮柱したつ岩根にしき建てて露もくもらぬ日の光かな』

と歌つた時、彼の聲は悲觀詩人の號泣でない。彼は平日の涙を忘れたのである。彼が、

『何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる』

と歌つた時、彼の涙は弱者の嗚咽ではなく、感激して泣くを恐れないのである……無ここに於て西行の出離解脱の宗教觀は一變して現實的になり、彼は西方の極樂世界を五十鈴に發見したのである。彼は歌ふ、

『榊葉に心をかけんゆふしでを思へば神も佛なりけり』

彼の和光同塵説は決して矛盾でない。彼の神佛が合體してその徳を發揮する時生をこの土に享くることを彼は如何にこの神廟に感謝したであらう。

私は今内宮へ崇敬の歩みを運ぶ西行を想像したい……彼の心は五十鈴川の水の如く清い。彼は天を突いて列なる大きな杉樹の間を過ぎ二の鳥居をくぐる。彼の心は嚴肅の感に打たれて愈々益々澄んでゆく。彼が左に神樂殿を見て神路山の麓大宮居の前に進んだ時、彼に崇徳上皇の憤死も淨海入道の榮華もない。

彼は多くの場合に落花の悲哀を歌つた、然し彼はこの神苑の花を見ては、

『岩戸あけし天つ命のそのかみに櫻を誰かうゑはじめけん』

或は又、

『神路山みしめこもるる花ざかりこは如何ばかりうれしからん』

の歌で久方の光のどけき櫻花の姿を喜んでゐる。彼は多くの場合に月を見て泣いた。然し彼は、

『神路山月さやかなる誓有て天の下をば照らすなりけり』

彼の自然禮讃は地上生活の是認となつてゐる。彼は悲觀的詩人である……然し眞實の詩人で誰か悲觀的ならざるものがあらう。彼に樂天的態度がないではない……然り眞實に悲觀的の間で始めて眞實に現實を是認することが出来る。西行は眞實の歌人、即ち詩人である。彼は泣くことが出来た。故に彼は天を仰いで現實を禮讃することが出来た。

西行の晩年を飾るものは『御裳濯川歌合』三十六番であらう。これは伊勢内宮の法樂の爲に集めたもので藤原俊成卿がその判をしてゐる。中に三十六番目左右の歌として、

『深く入りて神路の奥を尋ねれば又うへもなき峯の松風』

『流れたえぬ波にや世をば治むらむ神風涼し御裳濯の岸』

『御裳濯川歌合』は西行を國民歌人の最も偉大なものとするに十分であらう。これは彼後が世に残した文學的遺産として價值あるものの一つで、彼を詩人として論ずる場合には是非共なくならない作品である。これを他の悲觀的諸作に比較する時、彼はその他の大詩人の如くに兩極端を握つてこれ等を個性で統一した特異性の人であることを立證するであらう。

私は西行の直際問題にかへる。『濱荻を折敷きたる様にしあはれなる住居見るもいと心すむさまなり。大精進菩薩の草を座とし給へりけるかくやと覺えき。硯は石のわざとにはあらで、もとより水入るる所などくぼみたるを置かれたり。和歌の文臺は或時は花がたみ或時は扇やうの物を用ひき。歌の事を談ずとも、「一生幾ならず來世近きにあり」といふ文を坐臥の口ずさみに云はれあはれに貴く覺えしか』と西行が二見浦草庵の模様が、彼の弟子蓮阿の隨筆に出てゐるさうだ。然し西行は何處で一時の草庵を結んでも、まづかかる生活をしたものであらうと想像される。そして彼が二見浦を去つた時、弟子の誰彼が打ち集まつてその名残を惜み、西行も『君もとへ我もしのばん先ま立たば月をかたみに思ひいでつ』と歌つてゐるが、彼は到る所で詩歌の門人を見出したであらう。彼の名聲は生前既に文字通り津々浦々まで擴まつてゐたかも知れない。人々は到る所でこの飄々羈旅の一歌客を迎へ、それぞれ彼に便利を與へ彼の旅情を慰めたであらう。彼の旅行は乞食坊主の旅稼ぎではなかつた。

然し外形的には西行は破れた墨染の衣の頭陀僧に過ぎない、旅の見知らぬ人間が彼を尊敬す

る理由はなかつた。今伊勢を出て『東下り』の西行は、尾張三河を経て遠江の天龍川を渡つて小夜の中山を越し岡部の宿に着いた。西行の有名な歌として、

『年たけて又こゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山』

の一首がある。してみると彼はこの前に一度東遊の旅をしてゐる筈だ。恐らく『心なき身にもあはれは知られけり』の鳴立澤の歌も前東遊の出來事であつたであらう。この前東遊は多分西行の吉野入りをした『畿内めぐり』の後であつたであらうが、關東の何處まで彼の旅行が及んだかを知ることが出来ない。私は今西行が箱根山を越へ大磯小磯を過ぎて鎌倉に着し、鶴ヶ岡八幡宮の鳥居の邊を徘徊してゐると想像する……時は文治二年八月十五日とある。治承四年伊勢で福原遷都を聞いて西行は、今源氏の世となつてその首都鎌倉の地を踏んでゐる。ああ、この數年間に於ける源平二氏の盛衰は何んたる無量の感慨を西行に與へたであらう……源三位頼政が高倉王を奉じての旗擧は宇治川の埋れ木となつた、木曾から立つた旭將軍は粟津原の朝露と消えた、榮枯得喪は掌を反するが如く平家一門は壇ノ浦の藻屑と亡びた。そして伊豆から起つた頼朝は今天下を掌中に收めて、西行の眼前で八幡宮へ參詣し武運長久を祈つてゐるのであ

る。梶原景季は西行を怪しのもと睨んで彼の名前を尋ねた。西行は『昔は北面の武士佐藤兵衛義清、今は浮世を捨てた一法師西行である』と答へた。頼朝はこの事を景季から聞いて、和歌の清談がしたいか館へ来るやうにと西行へ告げさせた。西行は約束通り頼朝に伺候した。彼は語つた、『長承の末出家の望を遂げた時、私は秀郷朝臣九代相傳の兵法を焼いて捨てた。それ以来弓馬の道は私の心にない。然し私の和歌は花月に對する感興の言葉であるのみで、私は人に語るやうなその奥旨を知らない。若し止むを得ざれば私は和歌より寧ろ弓馬の道を物語つて折角君の御希望に添ひたい。』頼朝はそれでは有りし昔の武勇の祕密を聞かうとあつて、俊兼なるものに西行の談話を記録させた、そして彼等兩人は終夜物語に過した。翌日西行が頼朝の館を去る時、頼朝は引出物として銀の猫を西行に與へた。西行は銀の猫を手につけて門前へ出た……無邪氣な子供がそこに遊んでゐるのを見た。『おいお前にこの猫をあげよう』といつて、西行は頼朝の引出物を子供の足下に投げた。この愉快な挿話の後篇は傳へられてゐない。子供は銀の猫をどうしたであらうか。又頼朝はどういふ積りで旅の頭陀僧に銀の猫を與へたのか。然し私は軽い氣持になつて飄乎として其處を立去る西行の姿が眼に見えるやうな氣がする。

彼は鎌倉を去つて『人も住まず草花色々に咲き亂れて百の錦を廣げたらん心地して武藏野は行けども秋のはてぞなき』の景に入つた。彼はここで花の机に法華經をならべ、入於深山思惟佛道と聲をはり上げて讀經してゐる男を見た。この男は昔郁芳門院の侍であつたが、今法華經の力で後世を思ふの外餘念がないのである。そして彼は西行に、『此野中に住んで既に多くの年を送つてゐるが、御經の力であらうか、私は虎にも狼にも襲はれない。また其上腹が空いて來ると天童が雪のやうに白い物を持つて來て呉れる。私はそれを見ただけで滿腹の感を持つ』と語つた。西行はこれぞ尊い仙人であらうと感服して、人間は讀誦念佛して御佛を頼むより外はないといつて、

『いかでわれ清く曇らぬ身となりて心の月の影をみがかん』

と歌つてゐる。今草蓬々として天に連なる武藏野を後にして奥羽路に入る……白川の關で秋風に澄み渡つた月を眺めて、

『白川の關屋を月のもるからに人の心をとむるなりけり』

と、歌ひ、また關屋で、

『都にて月を哀と思ひしは數にもあらぬすさびなりけり』

と歌つた。實に西行は地上の月だ。地上の月が天上の月と互に感情が通じ合ふのは極めて自然である。特に千里と都を離れた旅の孤客西行が奥の細路を照らす秋天の月を眺めた時、如何に彼は悲しい夜半の袂を濡らしたであらう。私は嘗て書いた、『自然の現象の中で月ぐらゐる現實との接觸を嫌ひそれと偶然に握手することさへ肯じないであらう。月は悠然として實世界の野卑粗俗から逃れる。花を見給へ、佛壇を飾る清淨な蓮の花でも人情的である、世俗との友情を交換するやうに見える。然るに月となるとその地上から逃避する有様は如何にも巧妙だ。月は樹木の挨拶にも答へずにさつさと上つてゆく。山にも丘にも月を捕へる力がない。雲でも月にかかるとするりと逃げられて仕舞ふ。』私はこの言葉を移して以て西行に適用したい……現實世界をすりと逃れて詩歌の法悦に遊ぶ西行は確かに地上の月だ。月の姿は出離解脱そのものだ。月は永遠に生死の束縛を離れて毎夜安養淨土の新世界を開拓しゆく。私は月に人間の言思を吐かして西行のやうな歌をうたはせたい。

574566

然し西行は稀れなる名僧知識の跡を考へて、自分の世の捨て工合が完全でないことを歎ずることがある、人間界の羈絆に捕はれて生死に迷動することを思つて潛々と泣くことがある。彼は今葛の松原といふ所へ來て、松の木の下に竹の笈と麻の衣とがあるのを見出した。これには何か仔細があらうと思つて周圍を見廻すと、松の木を削つてその上にかうかいてあつた。『昔は應理圓實の覺待として公家の梵薙に列り今は諸國流浪の乞食として終を葛の松にとる。』世の中の人にはくすの松原と呼ばれる名こそ嬉しけれ」于時保元二年二月十七日權少僧都覺英、生年四十一申の刻に終りぬ。』西行はこの人こそ後二條殿の御子富家の入道殿の御弟で、十年もその行方不明になつてゐたが、『くすの松原と呼ばれる名こそ嬉しけれ』と最後せられたことは如何にも求道者の手本であると感じし、自分もそれに見習ひたいと自らを責めた。彼はそれから阿武隈川を渡つ壺の碑へ至ると、『去京一千五百里、去蝦夷國界一百二十里、去常陸國界四百十二里、去下野國界二百七十四里』とある……彼ははるばる遠方へ旅をしたものだと今更ながら感じた。彼は沼館その他の諸村落を過ぎ、ある田畑の間を通つた時由緒ありげな墓が見えたからその邊の男に聞くと、それは實方中將の御墓だと答へた。西行はそれを聞いて『朽

もせぬその名ばかりをとどめおきて枯野の薄のかたみにぞみる』の一首を詠んだ。

『三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有。秀衡が跡は田野に成て、金鷄山のみ形を残す。先高館にのぼれば北上川、南部より流るる大河也。衣川は和泉が城をめぐるりて、高館の下にて大河に落入、康衡等が舊跡は衣ヶ關を隔て、南部口をさし堅め、夷をふせぐと見へたり。楮も義臣すぐりて此城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷て、時のうつるまで涙を落し侍りぬ。』

夏草や兵どもが夢の跡

兼て耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の像を安置す。七寶散らせて珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に打て、既に頽廢空虚の叢と成べきを、四面新に開て薨を覆て風雨を凌ぐ。暫時千歳の紀念とはなれり。

五月雨の降のこしてや光堂』

これは秀衡榮華の跡を弔ふ芭蕉の文であるが、西行はこの奥州の都平泉が山に跨り谷に架して壯麗を極める姿を見た。清衡は後三年役の功に依つて餅田の豊田城からここへ移り、衣川と

太田川の中間に邸宅寺院市街を建設して子の基衡、孫の秀衡に譲つた……西行がここを訪れたのは正に秀衡繁榮の時代である。秀衡は鈴澤と猫間の二つの池の間に伽羅御前を、猫間の池の此方に高館を又彼方に柳の御所を建てた。北上川は東福山の麓を流れ、その流域からこの麓へかけて諸士の住邸や町家が櫛の齒のやうに並んだ。時に堂塔の總稱四十坊舎三面を誇る中尊寺は建築完成以來六十年ばかり経つたのみであつたから、西行はその輪奐の美に驚き京都にも比較なしと思つたであらう、又それ等を廻る山川の姿を見て彼は故郷懐しの感に打たれたであらう。

金色堂は三間四面、屋根は寶形造りの銅瓦葺、内外四壁床板悉く金色燦爛と光る。内へ入ると柱欄斗拱何れも珠玉を鏤め螺鈿を嵌して寶相華文が所狭きまでに施してある。殊に内陣の四本の卷柱は七寶壯麗、柱身は蒔繪で十二光佛が描いてあつて、佛様と佛様の間は螺鈿で寶相華文が配置してある。西行はこれぞ阿彌陀如來の御國で精妙莊嚴の極だと感じたであらう。私は今西行が念佛を唱へながら須彌壇へ近づくと想像する……彼は半肉打抜きで描出してある孔雀に牡丹唐草さては寶相華を配した迦陵嚩伽、見るもの悉く優麗典雅の萃を集めたもので自然に頭

がさがるやうに思つた。

彼はかういふ雄麗な構圖や卓越した意匠に花や月に於けるやうに涅槃の暗示を見て、彼は菩提の妙音が響いてくるやうに思つて有難涙を流した。

西行は何故にはるばる一千里を旅したのであるか。それは單に風雅と念佛の旅行であつたか……いな、彼は風雅と念佛との外、後白河法皇の命を蒙つて東大寺再興の大勸進職に就いた俊乘房重源を助けるため、秀衡の喜捨を得んとて陸奥に下つたのである。彼が平泉に着いたのは文治二年十月十二日で嵐の烈しい降雪の日であつた。彼は、

『陸奥の束稻川のさくら花よしのの外にかかるしら雪』

の歌から、想像すると、翌年にかけてここに滞在したに相違ない。彼はこの寂しい北國で年を送つて、

『常よりも心細くぞおもほゆる旅の空にて年の暮るれば』

と歌ひ、春光氷を破つて梅の花が白いのを見て、

『一人ぬる草の枕の移り香は垣根の梅の匂なりけり』

と歌つた。彼は秀衡を訪問した。然し西行は秀衡の豪華な生活には驚かなかつたが、彼の風流には感服した。秀衡はこの遠來の珍客を歡待したに相違ない。西行はそれに對する感謝の意味もあつて、彼が平泉を辭する時秀衡の所望通りに戀の百首を残した。

彼は櫻の花が落ちない中に平泉を立ち出羽の國に入り、瀧の山で、

『類なき思ひいではの櫻かなうすくれなるの花の匂は』

と再び櫻を詠んでゐる。彼はこれから越後に旅の道を取つて京へ歸つてゐるが、幾程の歳月を費やしたかその邊の消息は想像することも出来ない。

西行は今京都をどう見出したであらうか。源平二氏の動亂は靜まつたが保元平治以來の痛ましい戦争の痕跡は見るもの聞くものに残つて彼の心を悲しましめ、彼は阿鼻叫喚の叫びや酸鼻極まる修羅場の幻を全く忘れることが出来なかつた。彼は往生極樂を夢み靜寂の心境を憧憬して出家したが、果してそれを得たであらうか……彼は依然として生死に迷動する人間である。現實から遺瀨ない追憶を引きだして暗涙にむせぶ人間である。彼は大内右近を過ぎ鳥羽院の昔をしのび萬感胸にあふれて、

『情ありし昔のみなほ忍ばれてながらへばまた憂き世にもあるかな』

と歌ひ、昔の知人を尋ねると早や死んで居つて女房だけが泣いてゐたのを見て、

『亡き跡の面影をのみ残しおきてさこそは人の戀しかるらめ』

と歌つた。又ある時鳥邊山で亡き人を送り深夜の月をたち上る茶毘一片の煙の中に見て、

『鳥邊山鷲の高根のするならん煙をわけて出づる月影』

と彼は歌つた。

西行は夜冷い床に横はつて自分の如き不幸な人間はないと思ふことがある……彼が至心信樂の修行を邪魔するものは彼の詩歌である。彼は他を悲しましめるため現實世界を捨てたやうに感ずることがある。さういふ時に彼は『諸行無常の世だ』といつて僅に自分を慰める。

『撰集抄第四卷第四〕長承の末の年より無常心にしみて君の忠勤よしなくて、妻子をふり捨てて出で侍りしかば、我が身は流浪の桑門となり、契を結びし女は飾おろして高野の別所とかやに住み侍る。始はゆかりにつきて都に留まりきと承りぬ。妻子三所に別れて睦言のおるわざも侍らず、扱も胡馬北風に嘶き、越鳥南枝に巢ふと云ひならはせしにや。海人のぬれ衣おもほえて

又舊里に上りきて、住馴れし所を見るに築地崩れて門の傾きたりしを見しに、何となく哀に覺えて立ち入り見れば、ありしにもあらず、荒れ果てて人の通ふ氣色もなし。軒の苔垣の蔦、風ぞ僅に拂ひ侍る。昔くことなければ、まばらにて時雨も月もたまらじな。心のままに茂れる草の原にては蟲の聲々鳴きわたり、此處を寢屋とこそ占むべけれと思ひ侍る所までもさながら蟲の住家となりて殊に面白く侍りしかば、歸りて又是にも住まばやと覺え侍りき。身は舊宅の如しと云ふ文あり。この住家の荒れたる様我が身の無常思ひ知られて、いとど袂を絞りにて歸り侍りき。……これぞ人間斷腸の言葉である。然し西行は泣きながらも新生活の門を宗教に見出した。そこが則ち弱い西行が強い西行である所以である。

謡曲『大原御幸』の言葉に、シテ「山里はものさびしき事こそあれ、世の憂きよりは中々に、シテ、ツレ「住みよかりける柴の局、都の方の音信は、間遠に結へる笹垣や、憂き節繁き竹柱、立居につけて物思へど、人目なきこそ安かりけれ、歌「折々に心なけれど訪ふ、物は賤が妻木の斧の音、斧の音、梢の嵐猿の聲、これらの音ならでは、正木のかづら青つづら、來る人稀になりはてて、草顔淵が巷に、繁き思ひの行方とて、雨原憲が局とも、濕ふ袖の涙かな』

とあるが、西行の大原生活は『人目なきこそ安かりける』の生活であつた、山里は寂しいが住みよかりけるの生活であつた。それでも春の來ること遅いとあつては、

『み山こそ雪の下水とけざらめ都の空は春めきぬらん』

と歌つて京の空を眺めた。一向佛道を修行しながらも、追憶を語り合ひ涙の物語を話し合ふ人を慕つた。彼の歌に、

『山里に憂き世厭はん人もがなくやくしすぎし昔かたらん』
とある。

五

私の詩に『私の若い時には死にたい死にたいと私はいつた』の書出しの一篇がある。私は厭世家であつたが、私に斷の一字を缺いたがため、爾來幾十年も生きのびて今日に至つてゐることを歌つたものだ。然し二十前後の青年詩人で、恐らく四十年前の私のやうに厭世觀に魅せられないものはあるまい。青春の心は柔かい、庭の芭蕉のやうに破れ易い。少くも私に西行に於

ける同族の親友左衛門尉憲康の頓死のやうな事件があつたならば、私も現世を出離する僧院生活に入つて居つたであらう。又私の時代は十九世紀の末葉、私の生活場所は米國であつて、八百年前の陰鬱幽怪な京都でなかつた……西行の時代に厭世者となつて出家することぐらゐ眞實な人間に自然なことはなかつた。

保延五年に鳥羽上皇の後宮美福門院の御腹に皇子禮仁親王が生まれ、上皇が門院の愛に溺れて居られた結果當歳の皇子をあげて崇徳天皇の皇嗣とせられた。この事は正に崇徳天皇と生母待賢門院の衰亡を物語るもので、その外戚に當る人々即ち西行の主筋の徳大寺左大臣一家が如何に失望したかは容易に想像される。この時代に皇室の外戚となることは即ち宮中の權勢を掌中に納めることであつた。君寵を目的として後宮間に行はれた爭奪戰の如何に激甚であつたかは想像に餘りある。廷臣宮女の生活は神佛の祭祀法要に、春花秋月の遊興に、詩歌管絃に、表面上は如何に優美典雅に見えても、その心中の陋劣さは言語道斷のものがあつたであらう。西行は具さにこの消息に觸れた。彼はこの汚い人慾の暴露を何と思つたであらうか。今彼は自分の黨派の衰運を眺めて個人的同情を注ぐに吝なるものでなかつたが、彼は明敏な理性があつ

て、批評なくて自黨の行動を許すことが出来なかつたであらう。彼は野卑鬱結した時代精神を不愉快に感ぜざるを得なかつた。憲康頓死以前に西行はこの不愉快な雰圍氣を逃れるには出家の外に道はないと思つたに相違ない。

『空になる心は春のかすみにて世にあらじとも思ひたつかな』

『世を厭ふ名をだにもさは止め置きて數ならぬ身の思ひ出にせん』

と『世にあらじと思ひける頃東山にて人々霞によせて思ひをのべけるに』と前書して山家集に出て居つて、西行は出家前に人の前でかやうの意志を傳へてゐる。實に出家するといふことは彼には生命の新開拓である、擴大である、強者の行爲である。自然が一時的の榮枯盛衰の現實を離れて微笑み自分の姿を齊へる時、自然に解脱の姿がある、往生極樂の姿がある。人間も自然の各存在のやうにその姿を整理する時に眞實の魂が生れる、そして眞實の魂の聲が即ち眞實の詩歌である。故に詩歌の道は即ち宗教の道である。西行は出家すると同時に詩の詩歌が生れたのである。

佐藤左衛門尉憲康も生死の問題に對し西行と同じ意見を持つて居つた。この兩人は夕方の月を帯びながら連立つて御所から家路へ急いだ。彼等は松風清い片山里で悟道に入りたいと語り合つて別れた。然るに西行は翌朝參殿の途次憲康の家へ立寄つて彼を同行しようとする、門の内外で人々が騒ぎ、悲鳴の聲が内から聞えた。西行はただ事でないと思つてその仔細をたずすと、憲康は昨夜頓死したといふことである。西行は驚いて朝露の如き人生の果敢なさに打たれたが、これは彼を決心させる斷の善知識であらうと思つて友人の死に感謝し、直に鳥羽殿に伺候して、主君に發心出家のことを申入れた。龍顔近く仙洞に忠勤するのも今が限りかと思ふと、彼は名残がいとど惜まれて袖も涙に濡れた。然し彼はこれで長きに亙つた大問題も落着いたと思つた時、彼の心は一種悲痛な清々しさを感じた。彼は家へ歸つた……よく繪に西行が愛着の俗縁切れよとばかりに袂に縫る四歳の娘を椽から蹴落してゐる所が描いてあるが、西行はこのくらの決心を以て家内に出家の止むを得ない理由を説いたであらう。妻は彼を理解しなかつた、又理解して笑つて別れて呉れといふことは西行の無理であつた。『俺のいふ事が分らなければ勝手にしよ』と嗚鳴りつけて、どたばた西行は家を捨てていつたに違ひない。西行の妻は案外理性の勝つた女であつたであらうと想像される。然し彼女は女だ……夫は俗

塵を離れて佛の光明に俗するなどと口で綺麗なことをいつては、つまりは自分に厭いたので家を捨てたのだと思つたであらう。又或時は彼女は西行は他の女と一緒に何處かに隠れてゐるとさへ思つたかも知れない。彼女は理性の勝つた女だ……嫌はれたものならば後を追つたつて仕方ないと思つたであらう。如何に時代が八百年以前でも西行の行方が分らないといふ理由はないが、西行は恐らく『畿内めぐりや熊野詣』をして直ぐ『東下り』と京都を離れて仕舞つて居つたであらう。彼の最初の東下りは富士山見物が主で鳴立澤邊までで、多分武藏野までには及んで居らなかつたであらう。保元の亂間近くなつて彼が京都と高野山とを往復して居つた頃には、彼の妻は最早や出家してゐたであらう。

撰集抄第六卷中に西行が妻に立會つたことが書いてある、『神無月上の弓張月の比長谷寺にまゐり侍りき。日暮れかかり侍りて、入相の鐘の音ばかりして物寂しき有様梢の紅葉嵐にただよふ姿、何となく哀に侍りき。扱観音堂に詣りて法施なんと手向け侍りて、あたりを見めぐらすに、尼心を澄まして念珠をすりて侍りき。哀さにかく、（西行の妻）』
『思ひ入りてすす音の聲すみて覺えずたまる我が涙かな』（西行の妻）

と詠み侍るを聞きて、この尼こゑをあげて此は如何にと袖にとりつきたるを見れば、年頃偕老同穴の契り淺からざりし女のはや様かへにけるなり。』これぞ天から降つたか地から湧いたかの場面である。西行の妻は語つた、『私は君の遁世を疑ひ他の女と御一緒にお暮しかとも想像して君を恨んでゐました……今君の御姿を見て、私は疑ひ深い女であつたことを恥ぢる。私共は君に捨てられて以來寂しい生活をしました。今では娘を母方の伯母の家にあづけて、私は御覽のやうに尼さんになつて只管後世を願つて居ります。』西行はそれを聞いて喜んだ。如何なる場合を問はず又どんな動機からでも、人が出家するといふことを聞くぐらゐ西行を喜ばせることはなかつた。その後西行は四歳の時別れた娘に面會して彼女を出家させてゐると西行物語に出てゐる。西行に遁世勧誘病があつた。彼は公衛中將にそれを勧め又侍従大納言成通や中院右大臣雅定等にも勧誘してゐる。

『いつ歎きいつ思ふべきことなれば後の世知らで人のすぐらん』
と歌つて人に出家を勧めてゐるが、迷悟の境に立つといつた人に、

『世を捨てぬ心のうちに闇こめて迷はんことは君ひとりかは』

と歌つて自責の言葉としてゐる。然し西行は人に風雅を勧誘してゐない。詩歌の道は自ら求むべきものだ、人から教へられても何の役に立たないと彼は信じた。彼の詩歌は感興が自然に齎らす結果で豫定の行動でない。彼自身も如何にして彼の歌が出来たかの理由を人に語る事が出来なかつたに相違ない。私は文治二年鎌倉に於ける頼朝と西行との會見に興味を持つものだが、私の興味は西行が貰つた銀の猫を門前の子供に與へた所にない……私の興味は彼が詩歌を頼朝に語らなかつた點にある。詩歌は祈禱である、祈禱の言語は語られてもその心持は他に傳へられる筈のものでない。西行は詩歌は神聖で問題とすべきでないと思つて居つたであらう。この點が彼を和歌の第一人者だとするに十分である。彼は口で歌は語れないといふ……これが彼が作られた歌人でない證據でなくて何であらう。

愚秘抄に『先年仙洞にて老若の勝負の御歌合當座なりしに、西行出すな、たて籠めてよませよと勅定なりき、げにもと覺えて侍りしが、さればその時はさまで秀逸とおぼしき歌なかりき』とあるが、これは當然過ぎる當然である。如何に西行と雖も自然の感興のなき所から立派な歌を生むことは出来ない。彼は頭で歌を習つた技巧家でない、所謂六條二條の門に教を乞ふ

て辭章を練つた歌の製造人でない。西行は自然の諸現象に佛性を認めた時偶然に詩歌を拾つた汎神論者である。若し彼が普通の汎神論者と異つてゐるならば、それは自然の現象がいづれも彼と共に泣き或は時に笑ひ、罪障消滅の道として念佛を唱へてゐると思つた點にある。彼は自然の個性を認めた……即ち月は彼と共に泣き、秋の夕は彼と共に骨を噛むやうな寂寞を味つた。西行ぐらゐる個々別々の現象の劇的表現を眺めた歌人はない。彼はものの哀れを歌つた、又寂寞を歌つた、そしてそれ等を劇的に取扱つた。彼の歌の大部分は感傷的のものであるが、その感傷性が適當に表現された劇的姿勢は麗はしい。さういふ場合に彼の歌は自然の法則を音律に響かして自由の三昧境に立つたであらう。

彼の時代の詩歌精神は單調不活潑であつた。萎縮沈滞して千篇一律であつた。それ等が無味平凡な環境に吸込まれた時に、西行の歌だけは毅然として獨立の境地に立つた。如何となれば、それが詩歌の現實主義であつたからである。今日の詩歌の現實主義は有名無實の感なしでないが、彼のそれは實際の行爲そのものであるが故に、その價值は永劫に光を放つと云へる。今日彼の歌が生きてゐるやうに百年後も五百年後も等しく日本人に生きるであらう。私は現實

主義の半面は神祕主義であると信ずる……即ち西行の歌はこの二面を備へてゐる。彼は山川草木を現實的に眺めた、故に神祕的の表現をすることが出来たのだ。この奥旨は彼だけに屬するもので、彼とても人に傳へることが出来ない。定家が宮河歌合の判に『ひとの心幽に歌の姿高くして空よりも測がたし』といったのは、その點を認めたものであらう。又後鳥羽院口傳にも、西行の歌は『おぼろげの人のまねひなんとすべき歌にあらず不可説の上手なり』といつてある。

西行が二見浦滞在中、弟子蓮河は西行は『よき歌は誠にたやすく出来がたし祈りもすべき事なり』と云ひ、又『和歌は常に心に澄む故に悪念なくて後世を思ふもその心を澄しむるなり』と云つたと書いてゐる。彼の歌は祈禱から生れたものだ。如何なるものでも祈禱の姿は麗はしい。實に自然は祈禱のうちはその姿を齊へる……青い秋の空へ祈禱を捧げる櫛の木の姿は麗はしい。海岸に打寄せる春の海に祈禱を捧げる姿の木の姿は麗はしい。祈禱なきものは何物も生長しない。ああ、詩歌は祈禱から生れる時何たる麗はしい姿を備へるであらう。西行は『和歌はうるはしく詠むべきなり』といつたとあるが、それは決して外形的の言葉ではあるまい。詩

歌は祈禱の姿を得て始めて麗はしくなることが出来る。

然し彼の歌は生活の脚註みたやうなものだ。彼の歌は生活と相俟つて十分の光輝を放つ。あの意味からいふと彼の生活の方が彼の歌より遙に暗示的であつたと云へる。日本の文學史は長いが、西行ぐらゐる詩歌即ち宗教一つに生きた人間はない、彼の生活は普通の人間には奇怪に見えるであらう。然し彼自身には彼の生活は最も自然なものであつたに相違ない。

私は西行が如何なる風采風貌の男であつたらうかと想像する。セント・フランシスは快活な小柄の人で一寸見たよりは實際の方が高かつたと聞いてゐるが、西行もさういふ印象を人に與へたと思はれる。云はば中肉中背の日本人だ、きりつとした好男子であつたであらう。彼が出家前仙洞御所の武士であつた頃紺叢濃の直垂に唐綴緘の鎧を着け重藤の弓に二十四差したる大中黒の矢を負つた姿は、どんなに立派に彼が見えたであらう。彼は確かに紫宸清涼兩殿を飾るに足る美丈夫であつたに相違ない。男振りはよし歌は上手、これぞ鬼に金棒だ……彼は御殿の女連の間に人氣男であつたに相違ない。女房堀川中納言の局、さては待賢門院も非常な好感を彼に持つて居られたらう。堀川と西行との戀愛談を紡ぐことは出来ないが、晩年に至るも彼等

の交際は續いて堀川が、

『此の世にて語らひ置かむ郭公死出の山路のしるべともなれ』

といつて來たのに、西行は、

『郭公なくなくこそは語らはめ死出の山路に君しかからば』

と答へてゐる。彼は所謂遁世後は洗濯もろくにしない着物を綻びたまま着て居つたであらうが、いつも小綺麗にさつぱりと見えたと思像される。

小ざつぱりした好男子は得て潔癖家であるが、少くも精神的に西行は潔癖家であつた。古今著聞集にかういふ話が出てゐる、『西行法師出家より先は徳大寺左大臣(實能)の家人にて侍りけり。多年修行の後都に歸りて、年頃の主君にておはします睦まじさに、後徳大寺左大臣(實定)の御許にたどり参りて、まづ門外より内を見れば寢殿のむねに繩を張りけり。怪しく思ひて人に尋ねければ、あれは鳶すゑじとて張られたりと答へけるを聞きて、鳶の居る何かは苦しきとて疎みて歸りぬ。』これは一小事ではあるが西行の潔癖性を證明するに足る。それから、同文章に『次に實家の大納言はいづくにぞとね尋き聞けるに、北の方の思ふやうにもおはせざ

りければ、あながちに利をも留めたる御振舞うたてしとて尋ね行かず』とあるが、彼の性癖から見ると成程と思はれる。

セント・フランシスは苦行と實際的宗教の争闘で疲勞し僅か五十歳で死んだが、わが西行法師は七十三歳(或は七十八歳)まで生きた……セント・フランシスより二十年も長命した理由は何處にあつたか、西行は心に迷ひながらもその迷ひを人間眞實の姿と眺めて山川草木の間に悠々と一笠一杖の生活を續けたからであらう。假令芭蕉のやうに臨終の詳細は知ることが出来なくとも、私共はもう少し詳しくこの雲水流浪の歌人修行者の臨終を知りたい。東山雙林寺の傍の草庵で、

『願はくば花の下にて我れ死なむその更衣の望月のころ』

と歌つて、釋迦入滅の頃花と月との間に死にたいと願つた西行は、今河内の弘川寺の病褥に横はつてゐる。最早や酸鼻な保元平治の幻も彼に接近しない、崇徳上皇の痛ましい追憶も彼を苦しめない。彼はうとりうとりとしながら大自然が響かせる平靜な音律の波に浮んで、西方の極樂へと漂つてゆくやうに感ずる。彼は不思議な靈香を鼻に嗅ぐ、そして棚引く紫雲と紫雲との

間から聞える妙音を耳に聞く、彼は光明かがやく三尊の來迎を眼に見る……時は幽契違はず建久元年二月十六日、彼は西へ向つて微かに念佛し、最後の歌として……

『佛には櫻の花を奉れ我が後の世を人とぶらはば』

西行の死は廣く時の歌人の間に悼ました、俊成は『願ひ置きし花のもとにて終りみの蓮の上もたがはざらん』と、定家は『望月の頃はたがはぬ空なれど消えけん雲の行方悲しき』と歌つて悲んだ。西行死後七百幾十年、自然は時々刻々に榮枯盛衰の挽歌を歌ふ、私共の眼に時と空間とを超絶する詩歌の世界にこの多情多恨の一求道者の姿が永遠に彷徨するのを見る。

御裳濯川歌合

作者 西行法師
判者 俊成卿

野口米次郎

豊あし原の國のならひととして、なにはづの歌は、人の心をやはらぐる中立と成にければ、是をよまざる人はなかるべし。しかはあれども、よしとはいかなるを云、あしとはいづれを定むべしとは、我も人もしる所にあらざるものなり。そのゆへは、あをによし、奈良のみやこのと

き、えらびをかれたる萬葉集は、世もがあり、心ひとのをよびがたければ、しばらくをく。それよりこのかた、紀貫之、凡河内躬恒等が、えらべる所の古今集こそは、歌のもととは仰べきことなるを。同集のうたをも、或るにかける女にたとへ、しほめる花の匂ひのこるによそへ、或商人のよき衣きたるといひ、田夫の花のかげにやすめるがごとしといへり。是等のところをおもふに、撰集は、さまざまの歌のすがたをば、わがすそのすちにとりて、よろしきをとりにえらべる成べし。彼ときより後、四條大納言公任卿、さまざまのうたの道をみがき、あるはとをあまりいつつがひの歌を合、あるは三十あまり六つがひのうたをたたかはしめ、九しなの歌をさだめたり。これすなはち、おほくは古今集の内のうたを、あるは上上の品にあげ、あるは下が下の品にをけり。此等のたぐひは、疑心のむすほれぬべけれど、先達のことばをよぶ處にあらず。今の世の人は、歌のよしあしをいはむにつけて、さかひに入ざるほどに、しらざるものなり。抑歌合といふものは、上古にはありけむを、しるしつたへざりけるにや。亭子のみかどの御ときより、しるしをかれど、あるときは勝負をつけられず。あるおりは勝負をばつけながら、判の詞はしるされず、村上の御とき、天徳の歌合よりぞ、判のことは書きしるされて

後、永承、承暦の歌合、ならびに私のいへにいたるまで、勝負をつけしるすことになりたる。あるは佛事によせて結縁と稱し、或は靈社によせて、神感をかけてつがひをむすび、判をうけしむる間、かつは今の愚老にいたるまで、かたのごとく、古きあとをまねびつつ、をよばぬところにまかせて、勝負をさだむること、すでに數なく成にけむ。つらつらこのことをおもふに、かつは此道の先賢のなきがけにも、みおもはれむこと、その恥かぎりなし。いかにいむや、住吉明神より始奉りて、照しみそなはずらんこと、そのおそれいくばくぞや。しかるのみにあらず、齡かたぶき、老にのぞみて後は、朝に見ること、彼にわすれ、夜半の庭におもふこと、あかつきの枕にとまることなければ、古き時の證歌、今の世の作法、見ることきくことひとつも心に残事なし。よりてちかきとしより此かた、ながくこのことたちをはりにたれど、今、上人圓位、壯年のむかしより、たがひにをのれしれるによりて、二世のちぎりをむすびをはりにき。各老にのぞみて後、離居は山河を隔るといへども、むかしの芳契は、且暮にわするることなし。そのうへ、これはよの歌合の儀にあらざるよし、しめてしめさるる趣をつたへ承にまりて、例の物覚えぬひがこととも、注し申べきなり。さおもふやうの事のついでには、哀

におもひつづけられ侍ることを、とどめがたくてなん。むかし、天承長承の比ほひより、かくのごとく此道にたづさひて、或時は、はこやの山の花のもとにつらなり、ある時は、雲井の月の前に見なれしともも、むかしの夢にのみなりぬる世に、ひとの數にもあらず、桑の門のすて人と成ながら、今まで世にながらへて、かやうのすすることを書付侍るにつけても、竹の窓に露しげく、苔の袂しほりあへがたく侍るを、かかるもくづのみだれたることのはながら、かけまくもかしこき神かぜのつてに、みもすそ川のみぎは、玉くしのはのかげにもちり侍らば、おほうち人の中にも、をのづから、露の哀はかけられ侍らむや。

一番 左

神風に心やすくそまかせつる櫻の宮のはなのさかりを

右

さやかなる驚の高ねの雲井より影やはらくる月よみのもり

左のさくらの宮、右の月よみのもり、又勝劣なし、なを爲持。

ヨネ・ノグチ評。櫻の宮の花は今爛漫と咲いてゐるがその運命は神のみが知召す所である。

神風に何の邪念があらうと安心して、花は自らを美麗にするを念とすると歌ふ心はいい。私は

左の歌即ちこの『櫻の宮の歌』を右の歌に優れりとする。

二番 左

をしなべて花のさかりに成にけり山のはごとにかかるしら雲

右

秋はただ今宵一夜のななりけりおなじ雲の月はすめとも

左歌、うるはしく長高くみゆ。右のうた、是も歌のすがたいとおかし。十五夜の月をめづるあまりに、今夜一よの名なりけりといへる、心ふかしといへども、なほ残りの秋をすてむを、いかがとよきこゆ。左こともなくうるはし。勝と申べからむ。

ヨネ・ノグチ評。爛漫たる春の櫻を雲に譬へるは平凡である。又右の歌も理窟がかつて面白くない。この二首は面白くない點で持とすべきであらう。

三番 左

なへてならぬ四方の山への花は皆吉野あるこそ種はとりけめ

右

秋になれば雲のかげのさかふるは月のかつらに枝やさす覽

左右ともに心有て聞ゆ。但左の初の句、右の中の五もじ、殊に歎美のことばにあらずや侍らん。持なるべし。

ヨネ・ノグチ評。月の桂の連想は今日から見ると無意味であるのみならず、この月の歌には

生氣なし。吉野の櫻といふと今日の私共にも一種の優美をそそつて來るの感がある。私は左の歌をいいと思ふ。

四番 左

思ひかへす悟りやけふはなからまし花に染をく色なかりせば

右

身にしみて哀しらする風よりも月こそ秋の色はみえける

左のさとoryやけふはなからましといひ、右の月にぞ秋といへる、心すがたともにおなじ。又爲し持。

ヨネ・ノグチ評。人に憂愁をそそる秋の風は動いて止まない。然し天の月は一語の發すべき無く静寂ではあるが、時の移りゆく月の影には一段の憂愁の感がある。右の歌が勝だ。

五番 左

春をへて花の盛にあひきつつおもひ出おほき我み也けり

右

浮身こそいとひなからも哀なれ月をながめて年をへにける

左右歌、春秋月はことなりといへども、歌の心はおなじすぢなるを、思ひ出おほきといへるより、月を詠てとしをへにけるといひすてたるなど、少まさり侍らむ。

ヨネ・ノグチ評。同感。

六番 左

ねがはくは花のもとにて春しなむそのきさらぎの望月の比

右

こむ世には心の中にあらはさむあかでやみぬる月の光を

左の花の本にてといひ右の來む世にはといへる、ともに深にとりて、右は打まかせて宜歌の體なり。左は、ねがはくはとをきて、春しなむといへる、うるはしきすがたにはあらず、此體にとりて、かみしもあひかなひ、いみじく聞ゆる也。さりとて、ふかき道にいらざらむ筆は、かくよまんとせば、かなはざることありぬべし。これは又、いたれるときのことなり。姿は雖不相似、なすらへて持とす。

ヨネ・ノグチ評。左の歌の響かせる率直簡明で粗野に近い點に、私は西行の偽らない詩歌の心聞くやうに感ずる。俊成のいふ如く『春しなむといへるうるはしきすがたにはあらず』に相違ないが、そこを私は買ひたいと思ふのである。詩の表現として技巧論からいふと二つの歌ともに立派でないかも知れないが、私は左の歌が遙に右の歌よりいいと思ふ。

七番 左

花にそむ心のいかで残けむ捨はててきと思ふわが身に

右

更にける我世のかけを思ふまに遙に月のかたふきにけり

右歌、いとおかし。但左歌、なをこともなく宜、かちとや申すべき。

ヨネ・ノグチ評。私は西行の歌に『捨はててきと思ふわが身』の言葉が多すぎるの感がある。實際死ぬ死ぬといふものに死んだ例がないといつては失禮だが、この左の歌には骨にしみるやうな實感が薄いといひたい。右の歌の方が遙に隱當だ。

八番 左

八番 よしの山こそそのしほりの道かへてまたみぬかたの花を尋ねん

右

月を待高ねの雲ははれにけり心あるべき初しぐれかな

去年のしをりといひ、たかねの雲はといへる、安ころともにおかし。持とす。

ヨネ・ノグチ評。同感。

九番 左

よし野山やかていでじと思ふ身を花ちりなばと人や待らん

右

ふりさけし人の心そしられける今夜みかさの月を詠ひて

今夜みかさのとをける詞は、優に聞ゆ。ふりさけしといへる、初の句やいかにきこゆらむ。

左歌こともなく宜、勝と申べからむ。

ヨネ・ノグチ評。同感。

十番 左

立かはる春をしれともみせかほに年をへだつる霞成けり

右

岩まどちし氷も今朝は打とけて苔の下水道もとむらん

左歌、姿心相叶てみゆ。但みせかほにといへる詞、我も人もみなよむことばなり。さはあり

ながら、猶歌合などには、ひかふべきにやあらむ。かつは歌のさまによるべし。右歌、心詞お

かし。勝とや申べき。

ヨネ・ノグチ評。左の歌のやうな擬人法は今日から見ると實に鼻持ちがならない。右の『岩

まどちし』の歌は平凡な自然の姿ではあるが千古不滅だ……自然が平凡であるやうに平凡な歌

の姿が尊い。

十一番 左

色つつむのへの霞のしたもえて心をそむる鶯のこゑ

右

とめこかし梅さかりなる我やどをうときも人は折にこそあれ

左右、春の歌、ともに艶なるにとりて、右は今少おかしきさまにみゆる。左うた、詞いひとめぬさまながら、心なほおかし、今少まさるとや申すべからむ。

ヨネ・ノグチ評。右の歌は今日の私共から見るといささか似而非風流の感なきを得ない。そして左の『色つつむ』の歌は、平安朝の大宮人の着るといふ紫色の装束のやうに艶なれど何等詩的新鮮味なし。然し無理に勝負をつけよといふならば、俊成の判のやうに左の勝であらう。

十二番 左

山かつのかた岡かけてしむるのさかひに立てる玉のを柳

右

降つみし高ねのみ雪解にけり清瀧かはの水のしら波

左うた、さることありとみる心ちして、めづらしきさまなり。するの句、をの字や少いかが、さもよみてはべるかとよ。右うた、すがた面白くみゆ。まさると申すべし。

ヨネ・ノグチ評。右の歌は前出十一番の『岩まどぢし』の歌と同様に平凡な自然詩であるが十一番の歌の姿のやうに私を引きつけない。左の歌は路傍の第一印象に止まるが、かういふ所か

らも歌を拾つたといふ態度が出てゐて私は面白く感ずる。表面的に見ると右の方がいいが、そんな譯で私は左の歌を取る。

十三番 左

つくつくと物思ひをれば郭公心にあまる聲聞ゆなり

右

うき世おもふわれかなあやなほととぎす哀こもれる忍ねの聲

兩首のほととぎす、ともに心こもりて、よき持なり。

ヨネ・ノグチ評。兩首共に西行式感傷の歌で眞實味少い。西行には時鳥の歌が『哀こもれる忍ねの聲』と聞えたかは知らないが、私は時鳥の歌には『心にあまる聲聞ゆなり』の方が相應しいやうに思はれる。然し左の歌も前出八番の『更にける我世のかけを思ふまに』の歌と同じやうなものだ。心こもりてよき持ちの歌でなくて、つまらないのでよき持ちの歌であらう。

十四番 左

鶯の古巢よりたつほととぎすあゐよりもこき聲の色哉

右

きかずともここをせにせむ郭公山たのはらの杉のむら立

右の歌合の例は、花をたづぬるにも、みるをまさるとし、ほととぎすを待つにも、きけるを勝とすることなれども、是はただ、うたの勝劣を申すべきなりあるより。もこき心、おかしく聞えながら、又おりおり人よめる成べし。山田の原のといへるすがた、凡俗及びがたきに似たり。勝と申すべし。

ヨネ・ノグチ評。何故に山田の原が凡俗及び難いかを私は知らぬがこの判に私は賛成する。

十五番 左

ほととぎす深き峯より出にけり外山のすそに聲の落くる

右

五月雨の霽間もみえぬ雲路より山郭公鳴きて過ぐなり

右歌、難とすべき所なく、高く聞ゆ。左かた、ほととぎすふかきみねよりいでて、山のすそにこゑのおつらんほど、今まさしく聞く心地してめづらしくみゆ。左まさると申侍らむ。

ヨネ・ノグチ評。同感。

十六番 左

哀いかに草ばの露のこほる覽秋風たちぬ宮城のの原

右

たなばたの今朝の別れの涙をばしほりやかぬる天のは衣

左右の初秋の歌、ともに艶なるべし。但右はかやうの心聞なれたるべし。左みやきのはら、おもひやれるところ、なほおかしく聞ゆ、まさるべくや。

ヨネ・ノグチ評。初秋の歌に『露のこほる』といふのもちと變だ。右の歌も今日から見ると至つてつまらないといふ氣がする。いづれも愚作であらう。

十七番 左

大かたの露には何の成ぬらん袂にをくは涙なりけり

右

心なき身にも哀はしられけり鳴立立澤の秋の夕暮

鳴立澤といへる、こころ幽玄に。すがたをよびがたし。但左のうた、露には何のといへる、詞あさきに似て、心殊にふかし。勝と申すべし。

ヨネ・ノグチ評。左の歌の不自然さが私には面白くない。右の鳴立澤の歌の方がどんなにいか知れない。俊成が左の歌に『詞あさきに似て心にふかし』と評してゐるのが私にはどういふ意味か分らない。

十八番 左

あし曳の山陰なれはと思ふまに梢に告ぐる日ぐらしの聲

右

山里の月待秋のゆふぐれは門田のかせの音のみぞする

左のうた、こすゑにつぐるといへる、心ふかくゆへありて聞ゆ。但此まにといへる詞は、又人常によむことなれど、なをおもふべくやとおぼえ侍る。かやうの事は、人かへりてわらふべきことなり。しかなれども、一身思ふ所を、此次でに申出るなり。右歌は、難とすべき處なくはみえながら、又よみつべきことにや、なを左末の句、心まさると申すべきなり。

ヨネ・ノグチ評。私は寧ろ右の歌の自然さを取る。

十九番 左

長月の月のあり明のかげふけてすそのの原にをしか鳴也

右

月みはと契りをきてし古郷の人もや今宵袖ぬらす覽

すそののはらといへる、心ふかくして、姿さびたり。但人もや今宵といへる、詞をかざらずといへども、哀殊にふかし。右なほ勝るべし。

ヨネ・ノグチ評。同感。

廿番 左

蜚夜さむに秋のなるままによはるか聲の遠さかり行

右

松にはふまさはかつらちりにけりと山の秋は風すさぶらん

左右ともに、すがたさび、詞おかしく聞え侍り。右のまさはや、少いかにぞ聞ゆれど、と

やまの秋といへる、末の句優に侍れば持と申すべくや。

ヨネ・ノグチ評。同感。

廿一番 左

霜さゆる庭の木のはをふみ分て月はみるやとふ人もかな

廿二番 右

山河にひとりはなれて住よしの心しらるる波の上哉

右歌、いみじく艶にはきこゆれど、左歌、心すがた殊宜勝。

ヨネ・ノグチ評。別にいふことがない。

廿二番 左

大原やひらの高ねのちりければ雪ふる里を思ひこそやれ

右

枯野うつむ雪に心をしらすればあたりの原に雉子鳴也

左歌は、ただ詞にして哀ふかく、右は、こここもりて姿たけ有。なすらへて爲持。

廿三番 左

廿四番 左

數ならぬ心のかかになしはてししらせてこそは身をも恨め

右

もらさてや心の底をくまれました袖にせかるる涙なりせば

兩首の戀、共にこころふかしといへども、右のうた、なをよし有てきこゆ、まさるべくや。

ヨネ・ノグチ評。平安朝以降鎌倉期へかけての歌人の戀歌を讀むと、ただその情調の絲が如

何に精細微妙であるに驚かされるが、若しそれ等に生活の伴ふものがないとしたならば、それ

は單に空虚な言葉の遊戯に過ぎない。

廿四番 左

あやめつつ人しるとてもいかかせむ忍びはつべき袂ならねば

右

たのめぬに君くやと待宵のまの更ゆかて只明なましかは

左、しのびはつべきなどいへる、末の句はいとおかし。初の五もじや、いかにぞ聞ゆらむ。右歌、心ふかくやあらむ、又勝とすべし。

ヨネ・ノグチ評。ただ想像の上に於てのみとしても、西行にかういふ情緒が豊富にあつたといふことを私は感ずるのみ。私は歌の價値を批判しない。

廿五番 左

世をうしと思ひけるにそ成ぬべき吉野のおくへ深く入なば

右

斯る身をおほしたてけむたらちねの親さへつらき戀もする哉

左の、よしののおくへ入、右の、親さへつらき心、ともにふかくぞ聞こゆ。大かたは此いづこへと云への字は、これ又ふるくもちかくも、人よむことにはあれど、こひねがふべきにあらざる也。是もおもふ所を、つるでに申出るなり。但歌のほど持とす。

ヨネ・ノグチ評。この兩首共西行の傑出した作でない。

廿六番 左

人はこで風のけしきも更ぬるに哀に雁の音信て行

右

物おもへとかからぬ人も有ものをくやしかりける身の契り哉

左も、心ありてをかしくきこゆ。右歌宜、まさると申すべし。

ヨネ・ノグチ評。同感。

廿七番 左

なげけとて月やは物をおもはするかこちかほなる我涙かな

右

しらざりし雲井のよそにみし月の影を袂にやとすべしとは

左右兩音ともに心ふかく、姿優なり。よき持と申すべし。

ヨネ・ノグチ評。左の『なげけとて』の歌は所謂諧調も優麗で、その感傷情調に神秘的な所があつて人にいい感銘を與へる、そして遙に右の歌にまさると私は思ふ。

廿八番 左

あくかれしあまの河原と聞からにむかしの浪の袖にかかれる

右

津の國の難波の春は夢なれやあしのかれはに風渡る也

ともに幽玄の體なり、又爲レ持。

ヨネ・ノグチ評。私は枯葉に渡る風を聞いて春の夢も過ぎたことを感ずる自然さを取る。

廿九番 左

しげきををいく一村に分なして更にむかしを忍びかへさん

右

枝折せて猶山ふかく分いらむうきこときかぬ所有とや

左、このころことにふかく、右、いとふ心またふかし、なを可レ爲レ持。

ヨネ・ノグチ評。兩首共所謂歌人の常套情調で面白くない。

卅番 左

曉の嵐にたくふ鐘の音を心の底にこたへてぞ聞

右

よもすがら鳥の音おもふ袖の上に雪は積らで雨しほりけり

右歌、末の句などおかし。但左歌、ことに甘心す。仍爲レ勝。

ヨネ・ノグチ評。曉の鐘に耳をそばたてる寂寞の詩人の情調何物にも譬へることが出来な

い。到底右の歌のやうな愚作の及ぶ所でない。

卅一番 左

花咲し鶴の林のそのかみをよしのの山の雲にみる哉

右

風かほる花の林に春くれて積るつとめや雪の山みち

左、鶴林をよしののおくに察し、右、春風の花前に雪山を思へる。心すがた無レ勝劣、可レ

爲レ持。

ヨネ・ノグチ評。いづれもつまらない連想を人に強めるのみだ。

卅二番 左

驚の山思ひやるこそ遠けれど心にすむは有明の月

右

あらはさぬ我心こそ恨むへき月やはうときをば捨の山

二首、尺教のころ。左は靈鷲山をおもひ、右はをばすて山をひけり、天竺和國雖各別、所詮は心月輪を觀ぜり。歌の品も又同心、仍なを爲持。

ヨネ・ノグチ評。私はこの種宗教めきた歌にはとんと感服しない。

卅三番 左

わか葉さすひらのの松は更にまた枝にやちよの敷をそふ覽

右

澤邊よりす立はじむる鶴の子は松の枝にや移り初覽

左歌は、ひらのの松にわかばをささしめたる、定てそのゆゑありけんかし。右歌は、ただ澤べの鶴の子の、松にうつりそめたるは、悦のころ。左には及がたくやと覺え侍れど、うたのほどはなを持成べし。

ヨネ・ノグチ評。兩首とも至つてつまらない。

卅四番 左

くもりなき鏡の上にある塵をめにたててみる世とおもはばや

右

たのもしな君君にます折にあひて心の色を筆に染つる

左右ともに、由緒ありけむとはみえながら、左は訴訟のころ有、右聖朝にあへるにたり、仍右爲勝。

ヨネ・ノグチ評。西行はどんな天子様を心に描いてその聖朝を祝賀したものか私には分らない。

ヨネ・ノグチ評。西行はどんな天子様を心に描いてその聖朝を祝賀したものか私には分らない。

卅五番 左

ふかく入て神ぢのおくを尋ぬれば又うへもなき峯の春風

右

流たえぬ波にや世をばおさむらん神風涼しみもすそのきし

左歌は、心詞ふかくして、愚意難及。右鑑も、神かぜ久しく、みもすそのきしに冷かならんこと、勝劣の詞くはへがたし。仍持と申すべし。

ヨネ・ノグチ評。神意宇宙に満ちて春風千古に盡きない。上つては春の風となり、下つては御裳濯川の秋を歌ふ詩人の國土祝讚の情熱如何にも尊し。ここに於て西行は偉い感深し。特にこの二首は最初の『岩戸明し』と『神ぢ山』との二つと相應じてこの歌合に一層嚴肅の感を入りに與へず置かない。

まことにや、此歌はじみに、もも枝の松と侍るは、愚詠たてまつるべきにやとて

ふちなみもみもすそ川のすゑなればしつえもかけよ松の百枝に

副送二首

契りをきしちきりの上にそへをかむわかのうら地にあまのもしほ木

このみちのかたきさとりをおもふまに蓮ひらけはまたたつねみよ

世間書式 かへし

わかのうらにしほ木かさなる契りをはかけるたくものあとにてぞしる

さとりえて心のはなのひらけなばたつねぬさきに色ぞそむべき

表紙にかける歌

藤なみをみもすそ川にせきいれてももえの松にかけよとぞおもふ

ヨネ・ノグチ評。西行はどう思つて俊成に判を依頼したものか。これ等の判から見ると俊成は技巧家であつたに過ぎないことは明瞭だが、その批評が案外にはづれて居らないことを私は認めたい。西行は俊成などを相手にしなくてもよささうなものだと思ふ。彼にも世俗的な一面があつたかも知れない。

西行論

ブックレット

(第一編)



著者 野口米次郎

京都市中京區室町三條上ル

發行者 富田正二

京都市中京區堺町三條角

印刷者 鈴木直枝

京都市中京區柳馬場三條下ル

印刷所 株式會社 似玉堂

昭和二十一年八月二十五日印刷、昭和二十一年八月三十日發行

定價稅共八圓

發行所
配給元

京都市中京區河原町二條西

振替 京都二五七八四
東京都神田區淡路町

會員番號A二二〇〇七七番
日本出版配給株式會社

書店

西 行 備

(第一卷)

圖書
發行

東京海峽印刷所代印
發行所 東京市本町三丁目
電話 二二〇〇
日本出版印刷協會
會員編號 A 二二〇〇
東京市本町三丁目
電話 二二〇〇



東京市本町三丁目

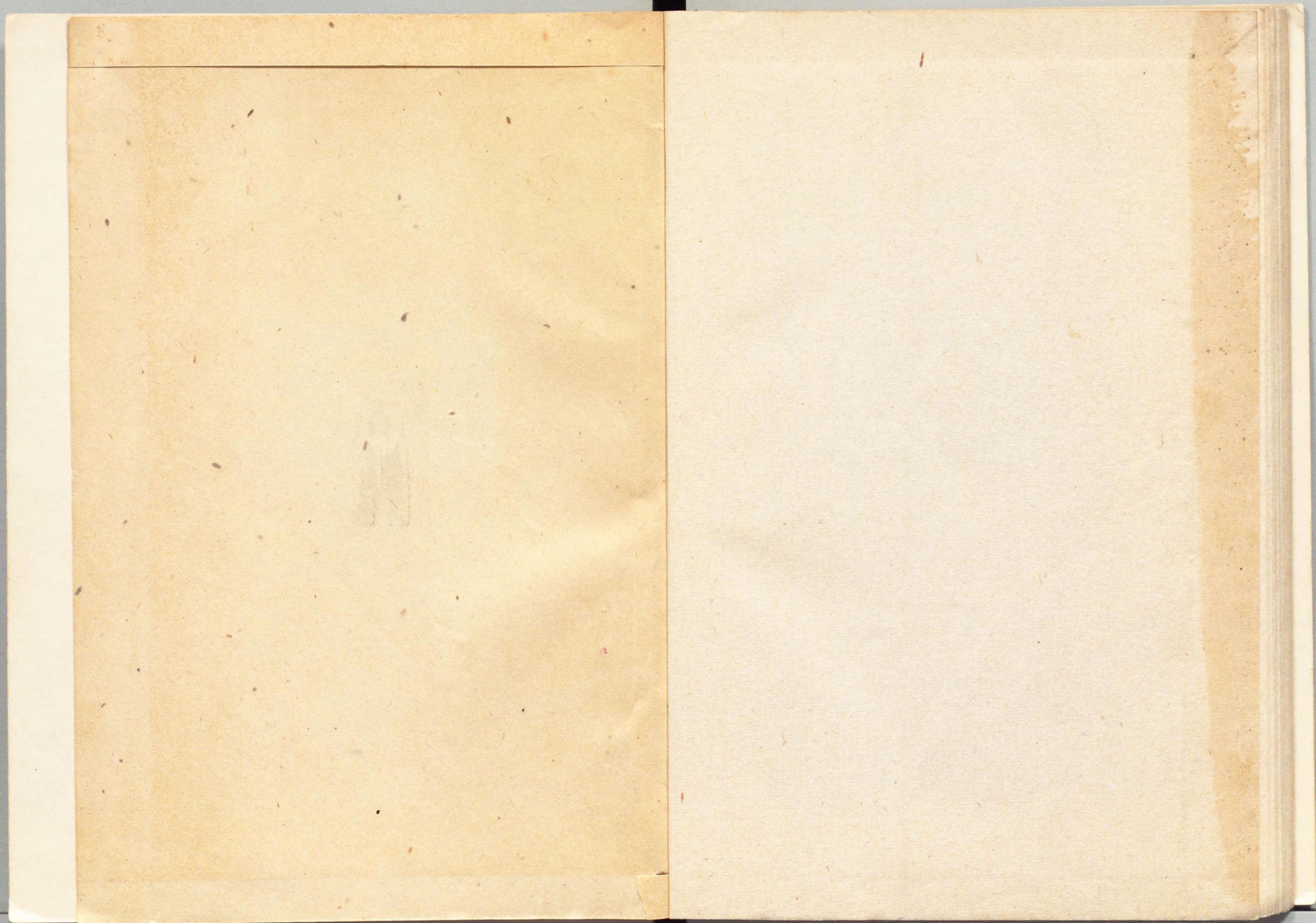
東京市本町三丁目

東京市本町三丁目

東京市本町三丁目

昭和二十一年八月二十五日出版 昭和二十一年八月三十日發行

定價 每冊八圓



ZK-34



